



蘭使日本紀行

二

ル 3  
1138  
2





ル3  
1138  
卷 2



陸地海一  
地球形

蘭使日本紀行上卷

月ノ虧缺スルヤ其陰必ラス圓ナルニ由リ日月  
ノ出沒スルニ由リ極度ノ高低不同ナルニ由リ  
我地球ハ陸土ト海水トニ成ルノ圓形物タル  
確知スルニ足ルナリ高山深谷アルモ軌道ノ高  
低アルニアラス今夫レ最モ高キ山頂モ最モ低  
キ谷底モ之ヲ地球ノ大サニ比較スレハ猶掌上  
ノ疣目ノ如ク又用壑セル田畝ニアル小窪ノ如  
キニ過サルノミ



地球ノ周囲。天ノ不可測ノ高所ニ恒星アリ又七  
惑星アリテ各自不同ノ軌道ヲ循環ス月下ニ雲  
アリ雲間ニ水分ヲ存シ雨霞或ハ雪トナリ或ハ  
雷電及ヒ返光トナル最低所ノ氣動搖シテ風ト  
ナリ其鳥類ニ於ケルハ猶海水動搖シテ波トナ  
リ魚ニ於ケルカ如シ匍匐獸及ヒ走獸又人類ハ  
地球ノ固定基上ニ在テ造化之ニ賦興スルニ大  
ニ廣所ヲ以テス人ハ小天地ナリ大天地ノ何ノ  
所ニモ住居スルヲ得一カラシム然ルニアリダ  
ムノ越度ヨリ以來幸福憂シテ災害トナリ精神

Gomer, Magog,  
Madai, Javan,  
Tubal, Meshech,  
Girras

及ヒ身體ニ罪科ヲ増加セリ但シ十六期前ニ於  
テ神聖アリ前世界ノ不信心ヲ歎キ之ヲ重科ニ  
象シテ其罪ヲ贖ハシメントシ是ニ於テ洪水ヲ  
以テ地上全面ヲ浸淪シ罪者ヲ消滅セリ而シテ唯  
僅カニ八人ノミアル持ノ如キニ乘テ其難ヲ  
遁レリ是則チ現今世人ノ始祖ナリ  
ノアクノ人祖類三子ヲ生ム其長チヤベツトト云フヤ  
ベツトノ子孫遍ク亞細亞及ヒ歐羅巴ニ蔓延セリ  
モセス氏ヤベツトノ子ヲ一テゴノルマゴグガイヤ  
フハンチユバルバルルメセク及ヒチラスノセ人トナスゴ



ノルハカスビス海沿テ下リシノリユーム  
巴東部ノ名今ノ城市ストラボ及ヒプリニユス  
ヲ押領シシメリ國ヲ立テアセナスリバツトタ  
ゴルマノ三子ヲ生ム是ヨリ各種ノ殖民アリ則  
チアセナハノデンニシテ佛國稱シテノドト  
地ノ地ヲ開キタリ然レ氏此説ハ諸氏ノ排ス  
ル所ナリ或ハ曰ク彼小亜細亞ノアスカニアチ  
領セリト或ハ曰クヘツセン及ヒサキセンヲ領  
セリトエウセビユス氏ハアセナヲ以テゴツテン  
日耳曼ノ父トセリ則チ今ノ獨逸ノヨーデ宗  
開祖

羅歐

ノ祖ナリ而シテバツトハ幼時スシチー  
羅巴及ヒ亜細亞ノ急峻ナル山岳ニリバツト山  
地名ヲ命シ其後更ニブラゴニ  
地ヲ領セリ又トゴルムト云フ者アリトゴル  
マノダゴルマノ後トス此人カバドシヲ過キ北  
カナトーレユデノヘネシト及ヒニ住スシヤルデ  
ノ一譯師ハトゴルマノ獨逸ニ殖民セシト  
固証スヨーデ宗徒ハトルコモ亦トゴルマニ出  
ツ故ニ土耳其帝ハ今尚トガルト稱スト云フ又  
マコグハヤベツトノ第二子ナリクールンリニ

東北ニ延  
哀スル歐

黒海ノ濱ニア  
ル小亜細亞ノ







迄タデスノ岬ハキチム岬ノ名ヲ存スト云フマ  
フハンノ季子ヲドダニムト云フドダニムハエビ  
ル昔ノ北部希臘今ハ之ヲノ部浴ニ住ス此ノ地  
ノ城市ドダナトニ於テハ擽樹ニ繫キタル銅壺  
ノ響ヲ聽キ以テ占考シゲユビトルド、ニユス  
ト云フ魔語ニ因テ有名ナリ又ゲユバリト称  
スル地アリヤヘットノ第五子ユバルノ居ル所  
ナリ後之ヲシリールト称ス他氏ハ此説ヲ取ラ  
スヨ―セフノ説ニ據レハ西班牙ニテ太古タリ  
シヒウスセチユバルト称スル城市ハ此國ニ於

テ猶チユバルノ名ヲ存スル所ナリト云フ又ノ  
セフノ苗裔ハ西刺伯ヲ侵セリ又ヤフェットノ子  
子アチラスノ住処ハ古説相異ナルヲ以テ述ル  
ヲ得ス然ルニヨ―セフ氏ハ之ヲトラモトル  
部ノ東ノ開祖ナリトシブリニユス及ヒノラトニ  
アチラトト称スル河アルヲ以テ其徴ナリトス  
他氏ハアチラトハ初ノブトロモトス  
ニ據テ住シ後當時ネステルトト称シ舊名チラス  
ナル河ニ浴テ歐羅巴ノサルマチニ轉居セシ  
トス又或ハチラスヲ以テボニシトノチリトノ



ノ開祖トシ或ハヂユリンゲルノ開祖トシ或ハ又  
タレンチー港ニ在ルチユリユートムト云フ舊市

故ニヤフエツトノ苗裔ハセムニ次テヘラムアツ  
シユルアルバシヤドリユドアラムト云フ五族  
アリテアルメニールシト印度ニ蔓延シ更ニ  
亜細亞ノ東部ニ及フ然レモ殊ニヘラムハヘラ  
ミート國ノ祖ナリ是ヨリベルシヤヲ生ス而ノ  
終ニヘラムミートント稱スル獨裁國ノ舊名湮没  
セリ以テ波斯ヲ開キタルヘラムミートノ父ト誤

マラレタリ又フツシユルハニニニニ於テア  
リノ威勢ヲ張り終ニヘラデン宗ノ經典ニハ  
此景譽ヲニニウスニ帰セリアルバンヤドノ事  
蹟ハモセス氏ノ説ニ曰クアルバエヨハセラ  
ブヲ生ミセラブハヘルヲ生ミヘルハニ子  
ヲ生ム其一ハ生時ニ際シ土地分裂スルノ故ヲ  
以テ之ヲベレデ不意義ト名ケ其第ヲヨクタント  
稱スアルモダードセレブハサルマヘトヤラハ  
ドラムユサルジクヲオバルアビマールセバオ  
ビルハヒラヨバビ皆ヨクタンノ子ナリソサ



オビールの百露ニ  
アラス  
三

市名ハルノヨリ居テ東方ノ山嶽多キ地セバル  
ニ徒ス其近傍ハセムノ子既ニ室家ヲ營ミ言語  
ヲ教ヘ土地ヲ開キ殖民ニ從事セリト云フ又ベ  
ネゲクチユスアリヤスモンタニユス氏ハヨク  
クンノ各子ノ事蹟ヲ記シ曰クブトロモネウス  
及ヒノラニ據レハアルモダドハラメオテスヲ  
開キ亞細亞サラマチニ住スセレブハセレビー  
ルヲ開キハガルマヘトハサルマオテクンヲ開キ  
ヤラハアラコシールヲ開キハドラハヒルユニ  
ールヲ開キユサルハオシアーンセバクトリア  
ネリスヲ開キジクラーハイマウス山中ノスセー  
レンヲ開キオバルハカラカシユストバロバニ  
ユスノ間ニアルオボリーテクンヲ開キビマルハ  
イマーンシユスヲ開ケリ此地ニハ極テ有名ナ  
ル高山頂アリセバハ有名ナルサセンヲ開ケリ  
ト云フ然レモ他人ノ説ニハ波斯ニ界スルサベ  
ールヲ以テセバニ出ルト為シ許多ノ證ヲ擧ク  
又オビールハ所謂サロモン氏貨賂ヲ獲ンカ為  
ニ三年毎ニ航海セシオビール國ナリトス  
オビールヲ百露ナリトスルハ妄言ナリ何トナ



レハサロモン時代ニハ航海ノ法極テ拙ナリ航  
行スル者他路ヲ知ラス唯大小海ノ濱岸ニ沿テ  
往復スルノミ未夕羅鍼ヲ知ラス烏ソ大洋ヲ横  
行スルヲ得ンヤ實ニ此指南安器ハ二百年前始  
テネアボリスアールフラヒウスノルシウス氏  
ノ創意ニ出ル所ナリ此器ノ力ヲ借ルニ非サレ  
ハ誰カ能ク何ニ由テ隨地ノ景色ト北極トノ外  
見ル所ナキノ天ノ下ニ於テ未詳ノ南地ト亞墨  
利加トノ間ノ市ヲ創見スルヲ得ンヤ諸家或ハ  
曰ク麻六甲ハオビールナリト然レモオビール

ハ亞弗利加ノ一地ヲサラニ求ムヘシ此地ニハ  
象牙及ヒ金銀ヲ産スルヲ夥シト而シトマス口  
ヘス氏ノ説ニテハ其地住人今尚サロモン氏此  
地ニ旅行シタルノ舊記ヲ藏スル者アリト云フ  
或ハ曰クヨクタンノ第十二子ハヒラハ鉛絶斯  
ヲ越テ印土文那高麗日本及ヒ他ノ諸島ニ至リ  
年月ヲ費シ殖民セリト或人ノ説ノ如クヨバビ  
果シテ亞墨利加ニ航セシヤ吾ヤハ言易ク証シ  
難シ又リエドハ順次ニテハセムノ第四子ナリ  
今夫レ可信記者エウセビウス及ヒサナラスノ



ヨシヤノ子孫  
本ニ猶氏ノ  
カノ子孫

説ニ據レハリジトルハ往時リユドヨリ生シタ  
ル勇猛ナル人民ヲ伴テ小亜細亞ヲ越ユルハ猶  
リユドノ季第アルムヨリアルノニールノ出タ  
ルカ如シ

セムノ子孫ニカムキユスミシライムビユト及  
ヒカナトシアリキユスニハ亜刺伯人属ス其致  
子中ニムロドアリ威勢以テ巴比倫ヲ建テ隣邦  
ヲ壓服ス更ニミシライムハ泥日土ヲ開キタル  
ハシイリ及ヒミシライノ名ヲ以テ知ルヘシ是今  
尚泥日土人ノ外亞刺伯人及ヒ土耳其人ノ稱ス

ル所ナリビユトハモレラニ住スブト  
ノウス及ヒフリニチスノ證スル如クビユチ  
ト河ノ漑ク所ナリヘーデン派ノ詩人ハビユト  
ハ天上循行ニ慣レタルバトシニ神名ナリト云フ  
カナトシハ有名ナル地名トナレリ是神聖ノイ  
スライルニ命シテ泥日土ヨリ旅行シテ開拓セ  
シノタルナリモセス氏カナトシノ後胤ヲ説ク  
ト左ノ如シ  
カナトシドレヲ生ム長子ナリ而シテト及ヒ  
イビユシユスリギルガレヒールアルキシニアル







ゴット人ハ西班牙ヲ略シロンバルド人ハロンバル  
バルシト云フ以太里ノ部落ヲ掠ノルマ  
人ハノルマンジトキ土耳其人ハ希臘帝國ヲ  
ラシク人ハフランク國ヲフハンダル人ハ亞弗利  
加ヲシユアベル人ハ匈牙利ヲ英吉利人ハサツ  
クスブリワトランドヲフリワト人ハ佛蘭西貌  
里太尼亞ヲウイルテン人ハキヤードン及ヒス  
ラトウト云フバタビトルノ島ヲ取り其地人民  
漸ク充塞シ往ム可ラサルニ至リ又其内亂ニ乘  
シテ從來抱ス所ノ適度ノ政法ヲ行ヒ伯帶比亞

シテ從來抱ス所ノ適度ノ政法ヲ行ヒ伯帶比亞

ハユトランドヨリ大洋ノ波濤ヲ冒シテフラン  
クレーキニ入りユニユスシテニユススカウリ  
ユスカシユスロンギニユスクロビオト五回戦  
争シテ皆勝ヲ得タリ此時若シマリユス羅馬ノ  
アルビス山ノ麓ニ於テ二十萬ノテウトネス  
ベルノ人ヲ破リ八萬人ヲ捕獲スルニ非サリセ  
ハ羅馬ハ滅亡ニ至リタル一シ而シンベル徒  
ハ此敗軍ニ終カニ身ヲ以テ免カルト虽其敗  
ヲ掩匿シテウエロナトノロンバルト王國城市ノ名  
ニ退ケリ

ゴット人ハ西班牙ヲ略シロンバルド人ハロン  
バルシト云フ以太里ノ部落ヲ掠ノルマ  
人ハノルマンジトキ土耳其人ハ希臘帝國ヲ  
ラシク人ハフランク國ヲフハンダル人ハ亞弗利  
加ヲシユアベル人ハ匈牙利ヲ英吉利人ハサツ  
クスブリワトランドヲフリワト人ハ佛蘭西貌  
里太尼亞ヲウイルテン人ハキヤードン及ヒス  
ラトウト云フバタビトルノ島ヲ取り其地人民  
漸ク充塞シ往ム可ラサルニ至リ又其内亂ニ乘  
シテ從來抱ス所ノ適度ノ政法ヲ行ヒ伯帶比亞



人ヲヘーリスヨリ追逐セリ。  
人民ノ轉遷ハ太古開國ノ後少ナシトセス。故ニ  
古昔ノベグロ、希臘、羅甸ノ記録ニ於テモ有名  
ノ轉居ノ証アリ。則チスシット人ノ壓倒サレタ  
ルベルセンボ、テムノ事ヨリシテトロヤン人  
ノ以太里ニ於ケルガロアス人ノガウケンニ於  
ケルアラニヤンズ人ノアシーンニ於ケルポニ  
シ、人ノ亞弗利加ニ於ケルバベルキユターア  
ワ、ハマト及ヒセフルハイム住民ノカナシーニ  
ニ於ケル皆轉居セルナリ。

抑モ葡萄牙及ヒカスチルニ於テハ二百年以來  
西印度及ヒ亞弗利加ニ殖民シ。殊ニ荷蘭合衆黨  
ノ最モ光榮トシテ移轉セシノ外ニ夥多ノ支  
那人、日本ニ轉居セシノモ亦名アリ。蓋シ日本國  
民ハヨアン、ホイゲン、リンスコ、ン氏ノ考察  
セシ如ク、元來支那ヨリ移居セシハ特別ナル事  
情ニ由レリ。然レモ其時世ハ分明ナラス。唯其第  
七期年間ニ在リシハ確然タリ。支那ノ一貴族ア  
リ。時帝ノ嚴命ニ堪ヘス。終ニ隙ヲ生シ重權ヲ執  
ルヲ得サルヲ憾ミ、帝家ニ抗シテ之ヲ奪ハント



和蘭の可憐な者

シテ其黨ヲ招キ集ム是ニ於テ争乱頗ル盛ナリ  
致戦ノ後帝室遂ニ勝利ヲ得人民ノ抗拒スル者  
モ皆帰順セリ然レ氏逆徒猶動モスレハ沸騰ス  
ルヲ以テ悉ク其黨共ヲ誅滅シテ一個ヲモ許サ  
ハルニ非サレハ其逆乱ヲ止ムル能ハサルニ至  
レリ抑モ此一事ハ一二執政者ノ心ニ快トサセ  
ルアリ殊ニ其中ニハ交友親戚ノ相關係スルア  
リ因テ此輩帝ニ奏シテ曰ク帝姑ラク其怒ヲ鎮  
メ邦國ヲ沉淪シテ久シク履意ニ漚タル血中ニ  
在ラシメサル為ニ此ノ伏罪人ノ生命ヲ絶クス

和蘭の可憐な者

シテ容易ニ之ヲ安ニスヘキ策アリ此策ヲ用エ  
レハ則チ大寶確定シ後未ノ患無カルヘシ其象  
置ハ逆徒ヲ高麗ニ對嚮スル荒島ニ放チ此島中  
ニ於テ保庇スルヲ得セシメハ何ソ必スシモ刑  
戮ヲ要センヤト帝此建言ヲ用ヒ逆徒ハ皆放免  
シテ自在ナラシム此時其地無住ナリシニ是ヨ  
リ殖民シ漸次ニ市邑共ニ充實スルニ至レリ是  
ヨリ日本ト称セリト云フ  
然レ氏支那ヨリ放タル者ノ子孫其罪科ト共ニ  
身ヲ匿サンカ為ニ言語品行共ニ勉テ支那人ニ

和蘭の可憐な者



異ナラシムヲ求メリ。支那人ノ前代ハ其髻ヲ束  
 不頂ニ長髪ヲ垂レ。貴價ノ簪ヲ用ヒシニ今日ニ  
 至テハ韃靼ノ風習ニ從ヒ。頭ノ周縁ヲ薙シテ。僅  
 ニ頂髪ヲ殘シ。之ヲ辮スルノマ。日本人ハ之ニ及  
 シテ。前頭ヲ剃シテ。紙ヲ捻シテ製シタル白條ヲ  
 以テ耳後ノ毛髪ヲ頂ニ束。木長サ指ノ如キ鬘ヲ  
 結フ。支那人ハ賓客ヲ禮待スルニ直立シテ一手  
 ヲ他手ニ接スレ。日本人ハ大ニ身ヲ屈シテ。髻  
 ヲ殆ント地ニ低ラシメ。以テ禮辭ヲ述フ。又支那  
 人ハ其髻長キヲ尚ヘ。日本人ハ領ヲ滑テス。且

ツ特別ノ敬意ヲ表スルニハ其履ヲ脱ス。又日本  
 人ノ風俗ハ他萬邦ノ俗ト異ナル者甚ク多シ。他  
 邦ノ人民ハ屋外ニ出ル時ハ外袍若クハ表衣ヲ  
 着ク。日本人ハ之ニ及シ。家ニ在レハ之ヲ脱スレ  
 他出ニハ必ラス之ヲ脱ス。他邦ノ人民ハ髪及  
 ヒ齒ノ白色ナルヲ以テ粧飾トスレ。日本人ハ  
 却テ此二物ヲ黒涅ス。又日本ニ於テハ白衣ヲ以  
 テ凶服トシ。黒衣ヲ以テ慶賀ヲ表ス。人ノ婦タル  
 者他出スル時ハ先行シテ婢女僕隸其後ニ從フ。  
 又孕婦ハ綳帶ヲ以テ緊シク腹ヲ括ルノ習アリ。



妊孕セサル婦ハ縋帶ヲ施サス既ニ妊孕スルヲ  
悟レハ則チ之ヲ緊縛ス此ノ如クスレハ安産ヲ  
得ヘシト為ルナリ又産室ニ在テハ少食ナラシ  
ム初生子ハ冷水ヲ以テ洗フ又歐羅巴人ノ快ト  
スル清香ハ日本人之ヲ嫌ヒ而シテ其喜ヒ用ユル  
品ハ歐羅巴人ノ佳トセサル所ナリ又我常用美  
味ナリトスル飲食モ之ヲ忌ミ我無味トスル所  
彼ノ美味トスル所ナリ食ニ當テ各自小膳ヲ供  
ス且我輩ハ夏日冷飲ヲ喜ヘ且日本人ハ冬夏ノ  
別ナク常ニ熱飲ヲ用ユ我輩ノ好テ聽ク所ノ歌

曲吹笛彈琴胡弓琵琶喇叭ハ皆彼ノ耳ニ適セス  
歐羅巴ノ藥劑ハ甘味精煎シテ之ヲ病者ニ與フ  
レ且日本人ハ微温ニノ鹹味且ツ強烈藥劑及ヒ  
散末ヲ用ユ我輩ハ屢刺絡ヲ施セ且日本人ハ絶  
テ之ヲ施サス又日本人ハ冷水ハ熱ヲ解キ温液  
ハ渴ヲ止ムトシ病者ノ飲食ハ一切其嗜ム所ニ  
任セ凡ソ飲食ノ嗜好常ニ變ヒサルハ健康ナル  
ノ徴トナセリ  
日本ニ於テハチヤ<sup>Cha</sup>或ハチヤ<sup>Chia</sup>ト称シ茶葉ヲ熱  
湯ニ和シテ飲料トナシ之ヲ賞翫セリ則チ支那



ニ於テテトト称スル物ナリ。稍為シ得ヘキ餘力  
アル人ハ必ラス此飲液ヲ調理スルノ別室アリ  
テ高價ノ器具ヲ排列ス。此飲茶ニ式アリ。縦令高  
貴ノ人ナリト雖。推勢ヲ挾マス之ヲ調スルニハ  
主人自ラ手ヲ下シ較テ臣僕ニ任ネス。若シ式法  
ヲ以テ賓ヲ招ケハ磁器ニ茶末ヲ入レ熱湯ヲ和  
シ之ヲ進ム。此磁器ノ貴キ一金剛石紅寶石ニ勝  
ル。其價格ハ古昔茶博士ノ鑑定スル所ニシテ之  
ヲ保証スルノ手記アリ。此鑑定家ハ恰モ我邦ノ  
銀冶ノ金銀ヲ鑑定スル如ク其價ヲ定メ古昔ノ

作者若クハ巧妙ニシ有名ナル人ノ手ニ成ル物  
ナル中ハ甚ク騰貴スルナリ。

故ニ嘗テ豊後ノ國候ハ三個ノ茶器ノ為ニ金一  
萬四千ジユカ一テシテ擲キ又場ニ住スル一巨  
商ハ千四百ジユカ一テシテ以テ一茶碗ノ三所  
ニ損傷アルニ拘ラス購求セリ。

又墨画ノ密樹若クハ飛禽ノ幅ヲ愛翫シ昔時有  
名画工ノ筆ナレハ其價ノ貴キ一人ヲ驚カスニ  
至ル。又非常ニ大小ノ刀劍ヲ貴重シ是亦名工ノ  
作ル所ナレハ其價四五百コロシニ騰ルアリ。



日本人ハ抑モ何ノ時世ニ何ノ處ヨリ來住セシ  
 ヤ之ヲ詳ニシ難シト虽初テ歐羅巴ヨリ渡航シ  
 其内地ニ進入セルゼスイツト宗ノサヒル氏  
 ハ其土人ノ説ニ據テ此國ニ人ノ移住スルハ七  
 百年前ニ在リトセリ然レモ明徴ナシ故ニ疑ハ  
 サルヲ得ス後年許多ノ殖民隔天ノ國民來住ス  
 ルノ事ニ至テハ歐羅巴人ノ想像スルヨリハ更  
 ニ其以前ニ在ルヘシ  
 韃靼ハ全地球上最モ大國ニシテ支那高麗日本  
 亞墨利加ノ人民ノ源ナルハ人皆唱フル所ナ  
 リ更ニ此説ヲ固定スルハ此諸邦ハ多クハ河流  
 海灣ニテ相阻隔スレモ別ニ附着スル所アリテ  
 且ツカリホルニヤ北亞墨利加ノ上ニ在ルアニ  
 アント云フ有名ナル街坊及ヒ北亞墨利加トカ  
 タヨ北部ノ間ハ氷海之ニ漚カス是其地勢相  
 接属スルヲ以テナリ

日本ノ地勢ハ確明ナラス或ハ島ナルヤ北海灣  
 ニ接スルヤ未タ知ル所ナシ抑モ日本將軍ニ使  
 シ關東ニ客遊セシフランコシスカロシ氏ノ証  
 スル所ニ據レハ關東ニ江戸ト称スル將軍ノ居



蝦夷ハ日本ニ對ス

蝦夷ノ唐衣ハ  
日本人ナラ知ラズ

土人野蠻ナリ

東地ニ區別

城アリ該地ヨリ東北二十七日程ニシテ海ニ接  
シタル土地ノ海岬サガレシト云フ地ニ到リ内  
海ヲ航スレハ荒蕪ノ地ニシテ山岳多シ然レハ  
貴重ノ毛皮ニ富ム蝦夷ト稱スル國アリ日本人  
ハ屢此蝦夷ノ地ニ深入スレハ曾テ其涯限ヲ極  
ムル者ナシ將軍亦之ヲ不問ニ附ス蓋シ該地ニ  
客遊シ其廣袤幾許ナルヤヲ察セシカ為ニ赴カ  
ントスルニハ衣食万般ノ要具ヲ備ヘサル能ハ  
ス然レハ徒ニ久シク氷點ノ地ニ漂泊シ未夕曾  
テ其極地ヲ見ス抑モ該地ハ支那人ニ類似スル  
髭ヲ生シタル人ノ住スル処ニシテ野蠻猙獰ナ  
ル輩ハ土地ノ巨大ナルヲニ及シ毫モ知識ナシ  
然レハ該地ノ日本ニ固着スルハ辨ヲ待タス其  
故ハサガレシト蝦夷ノ間ノ内海ハ危難ノ航路  
ナレハ四十里ニシテ奥州ノ土地ノ荒蕪シタル山  
岳ニ接ス是ハ蝦夷ト内地ト相接スル所ナリ此  
海港ノ沿路ハ用ヲナシ難シ故ニサガレシヨリ  
蝦夷ニ至ルノ津頭ハ現今撐ヲ用ヒテ通スルヲ  
得ルト云フ

誰人カ日本ヲ創見シタルヤニ尋ネ及ハントス



之ヲ弄セントスレハ人誰カ退屈セサラレヤ古  
人地球ヲ分テ歐羅巴亞細亞亞弗利加ト為ス數  
百年ノ後此歐羅巴亞細亞亞弗利加ハ人民住居  
スル世界ノ三分ノ一ナルヲ悟ルニ及テ一人モ  
之ヲ驚カサル者ナシ一學士セホカハ羅馬人ナ  
リ開闢後少時ホ帝ノ時ニ方テ未見ノ印土ア  
ルヘキヲ疑ヘリ今タデアノ悲哀スヘキ演劇  
中ヨリ其詩ヲ掲ケ譯スレハ  
世界ヲ遍ホク歷過スルニ常ニ必ラスシモ地  
上ノニニアラス印土人ハ熱口ヲ以テデンキ

ルレアラセスヲ吸引セリ人ハ波斯國ヨリ  
エレヘヲ吞ム又レインヲ吞ム百年來ル是ニ  
於テ帶ヲ為スハ大洋ナリ彎曲セル濱ノ周圍  
ニ落ツヘシ新地球ヲ發見スヘシ舟士未開  
地ヲ見ルヘシ海復タ氷國ヲ繋カス世界ノ窮  
極ニ達スルヲ得ヘシ

近世ニ至テ第三ノ大ナル世界ヲ發見シ歐羅巴  
亞細亞亞弗利加ニ於テ之ヲ亞墨利加ト稱ス又  
南方ニ於テ一ノ未顯國ヲ加ヘタリ此地ハ歐羅  
巴ト亞弗利加ニ對シ亞墨利加亞細亞ニ向ヒ荷



西航の始末

蘭ノ航海者ノ後見セシ所ナリ

西印土後見ニ先鞭ヲ着ケレハキリストフヘル

コロンヒユスナリ此人ゲニユアトサルド國ノ

閣龍氏ノヲ出テ葡萄牙ニテ婚娶シマデラートア

北亞弗利加ノ西ニアリ島ニ居ヲ占メシニ偶

亞弗利加ニ赴クノ一商船大風巨濤ノ為ニ未詳

ノ海洋ニ漂到セシアリ久シク停泊セシ後舟士

多ク餓死ス一舟士氷夫三人ト共ニマデラーニ

上陸シタレハ皆餓餓ニ苦ミ病ヲ生シ數日間ニ

死ス此時一舟士閣龍氏ノ家ニ投宿シタル者旅

行日記ヲ遺セリ閣龍氏此日記中ヨリ許多ノ緊

要事件ヲ抄録セリ

是ヨリ先ニ閣龍氏フロレンセンノ一醫マルキ

ユスボリユスト交友タリ此人世人ノ未タ知テ

サレ住民アルノ地方ノ必ラス他ニアル一キヲ

因信スルノ説ヲ演ス閣龍氏深ク之ヲ心ニ銘ス

既ニ前ノ日記ヲ得ルノ後ヨリ航行ノ念愈奮

起シ其企謀ヲ葡王ニ説キ又英王第七ヘシリキ

ニ説キ二三船ヲ艤シ新世界ヲ後見スルニ從事

セシ一ヲ以テスレハ兩王共ニ之ヲ允サス蓋シ

西航の始末

西航の始末

西航の始末



4冊全三冊記  
白紙

其人卑賤ナルヲ以テ慢言以テ他ヲ欺クナリト  
シテ之ヲ排セシナリ岡龍氏其言聽カサレ志  
益固ク變セス然レモ敢テ之ヲ議スヘキ人ナシ  
此ノ如キ一七年ノ久シキ後始テヘルジヤント  
大ニ其言ヲ喜ヒ聽ケリ但シ此人ハモ一レシヨ  
リガラナリテ強奪シ長ク之ヲ領スルニ至レリ  
此ノ苦戰ノ為ニ庫賤ヲ傾ケタレモ尚一萬七千  
ジユカ一テ一抛テ一艦ヲ購求セリ

千四百九十二年九月一日岡龍氏一大艦ニ小舟  
ヲ伴テカナリア諸島ニ向テ出帆セリ偶忍ルヘ

フエラシク判見ス

キ颯風ニ逢テフロリダニ漂着ス舟士皆曰ク千  
辛万苦ヲ冒シ死地ニ赴カレヨリハ寧ロ西班牙  
ニ帰ルニ若カスト岡龍氏聽カスフロリダニ在  
留スル一久シク而シテ其周囲諸島ヲ巡廻シ茲ニ  
金坑ヲ發見セリ則チ此地ニ定居セント欲シ堅  
城ヲ築クヲ緊要ナリトシ土木ノ功ヲ速カニシ  
成ルニ及テ西班牙人四十名ヲ留メジゴアラ  
トシテ之ヲ宰セシム

諸事整頓スルニ及テ岡龍氏印土人十名ヲ伴ヒ  
許多ノ財寶ヲ帶テ帰家セリ再航スルニ及ハス

帰家ス



ヒスパンオラ及ヒ  
キバヲ判見ス

ハムゴラシオス及ヒ  
ガナ

葡王アメリキヤ  
ハムゴラシオスノ  
ハムゴラシオスノ  
ハムゴラシオスノ

アメリ  
シ

ブラシル  
判見

シテ大事ヲ成セリ。後岡龍氏再ヒ出帆シ。強勇ナ  
ル諸島ヲ復見セリ。之ヲヒスバニオラ及ヒキユ  
バト称ス。又西印土ノ海灣ヲ往復シテ南北數百  
里ニ亘リ。終ニ一港ヲ得タリ。ノムブレデジオス  
ト。バナマトノ間ニアメリカアリテ其距離十八  
里ニ過キサルヲ見ル。抑モ岡龍氏ノ西印土ヲ復  
見スルニ十四年ヲ費ヤセリ。後ニ岡龍氏ノ挑撥  
ニ由テ他ノ舟士此大洋ニ航スル者多シ。其内最  
ナル者ハフロレンセン生ノアメリキユスヘス  
ビユキユスナリ。又葡王ユマニウル。千五百年ニ

岡龍氏ノ例ニ依リ西航シテ新邦ヲ復見セン。一  
ニ執心セリ。西印土ノ廣濱今日尚アメリカノ称  
アリ。  
ブラシルノ地ヲ復見シタルハアメリキユス一  
スピユキユスナリトスレ。葡國史家ノ説ニ據  
レハベトリユスアルフレス、カブラレスノ復見  
ナリトス。又岡龍氏ニ次キフハスキユス、ニユト  
ス、バルボアト称スル者アリ。此人勇敢ニモノ  
ムブルデシオスト。バナマノ間ニアル亞墨利加  
ノ海峡ヲ復見シ。千五百十三年ニ當テ極南海ニ



カスチル王ノ葡人ト  
大ニ新地ヲ發見ス

至レリ。此南海ハ其深サ測ル可ラス。東西印度ノ  
地ヲ環クレリ。

此ノ茂見セシ邦土ニ關シテカスチル國王ト葡  
萄牙人トノ間ニ大爭論起リ葡人ハ羅馬法王ヨ  
リゲニユス四世ノ時既ニ許可ヲ得タルヲ以テ  
證トナシ新世界ハ全ク己レニ屬スヘシト主張  
シカスチリ人ハ千四百九十三年羅馬法王アレ  
キサンデル六世ヨリ免狀ヲ受ルアレハ西阿弗  
利加ノ崎岬ヲエルドニ對シテヘスヘリード島  
ニ連ナル諸地ハ皆カスチルノ有ニシテ其餘ヲ

ハ

カスチル王ノ葡人ト  
大ニ新地ヲ發見ス

以テ葡ニ屬スト唱フ此ノ如ク分界ヲ立テ相争  
フカ故ニカスチル人ハ東ニ向テ新世界ヲ開ク  
ヲ得ス以テ東印土ニ出テモルシス島ニ産スル  
所ノ香料ヲ得ント着目スレ其艦ヲ東スルヲ  
得ス是際フエルジナンマゲラネス氏ハ背後ヨリ  
南海ニ浴テ西方ニ向ヒモルシス島ニ航スヘキ  
新路ヲ見出シ東印土ニ於テアルホンシユアル  
ロユルケルクノ葡王ノ為ニ久シク勤勞セリ然レ  
モ葡王其忠勤ヲ賞セサルヲ以テ終ニ王ニ對シ  
テ陰ニ怨恨ヲ含メリ依テマゲラネス氏ハ法王

カスチル王ノ葡人ト  
大ニ新地ヲ發見ス



ノ宗教ノ別派カール五世西班牙國王ニ請フニモ  
ルシス島ニ赴ク航路ヲ開カシテ以テシ千五  
百九十年五艘ノ巨艦ヲ以テ海ニ航シセフイリ  
ニヨリブラシルニ向ヒ五十三度以上ニ南進シ  
甚ク廣濶ナル市街ヲ其地ニ於テ茂見セリ故ニ  
此市街ハ今尚マゲラネスト稱ス此時市街ノ傍  
ニ至テ一艦ハ暗礁ニ觸レ破損シ又一艦ハ難風  
ニ逢ヒ夜中錨ヲ拔キ轉旋シテセフイリニ  
退走セリ然レモマゲラネス氏ハ南海ニ於テ咫  
々漂泊セシ後終ニシユビユスト稱スル一島ニ

マゲラネス殺害セ  
タリ

達シ上陸シタルニ部長等及ヒ水夫ト共ニ饗禮  
ヲ受ケシカ其席ニ於テ島人ノ爲ニ殺害セラレ  
タリ

五船中僅カニ一  
艘

其後舟士等ハ三艘ノ艦ヲ有スルモ之ヲ運スル  
ニ力足ラサルヲ以テ其中脆弱ナル一艘ヲ燒キ  
二艘ハ各帆ヲ揚ケ其行程ヲ増シモルシス島ニ  
向ヒチードルト稱スル処ニ於テ錨ヲ投シ前ニ  
謂フ所ノ香料ヲ積ムヲ得タリ然レモ一艘ハ破  
損シテ罅隙ヲ生シ水ノ入ルヲ恰モ栓ヲ抜クニ  
異ナラス終ニ沈没シケレハ五艘中僅カニ一艘



ヲ餘スノミ。此艦三年ノ經テセフイリ。ト  
港名ニ歸シリ。其船號ト船長ノ名ハ長ク書丹ニ  
記ス所ナリ。船長ハビスカイノ西班名ノ人ニテ  
ヨアンセバスタヤインラニユスト稱シ。船號ハ  
ウヰクトリヤトヲフ。

其後モモルシス島ヲ窮ノンカ為ニ航海スル  
三回ニ及フト。虽長路ニモテ費用夥シ。故ニ達ス  
ルヲ得ス。然レモ西班牙人ハ亜墨利加ノ南海ニ  
沿テマゲラネスノ南墨利加ノ海畔ニ寄寓セリ  
備テ墨是哥ニ赴キレクエルジヤンコルテシユ

コロンブス  
墨是哥ノ取ル

ス氏ハ千五百二十年モテシユマト稱スル國王  
ヲ其宮ニ捕ヘ且ツ兵勢ヲ以テ廣漠ナル墨是哥  
ヲオーステンレーキノ屬地トナセリ。コルテシ  
ユスハ此ノ如キ偉効ヲ立テシニ偶西班牙人闘  
争ヲ起セシヲ以テ之ヲ鎮撫セシカ為ニ窓間ヨ  
リ外ヲ眺シニ。謬テ一箇ノ飛石ニ撃ケ中テラレ  
創ヲ蒙ルリタリ。

コロンブス  
墨是哥ノ取ル

墨是哥ヲ取ルノ後五年ヲテシキスキユスビサ  
ルリエスハウーレル五世ニ百露ヲ屬セリ。此事  
ニ匪勉スル。一六年ナリ。是ニ於テアタバリサ王







ハ成就スルヲ能ハス。然ルニ詐欺ヲ事トス。豈ニ  
承久ナルヲ得ンヤ。カサル帝宮ニ一ノミスブリ  
トススルガセヲアリ。技群ノ人ナリ之ヲ百露ノ  
後ニ放逐セリ。此人一揆ヲ撲滅シ且ツ帝ヲ舊ニ  
復セン。トテ謀リ先ツバレシチンセテ得更ニ  
セキユンテトンセビスドハヲ得タリ。  
然レトヘルジナントピサルリユスハアルマダ  
リユスヲ殺スノ罪ヲ以テ長ク西班牙ニ捕ハレ  
タリ。神聖ノ廉直ナル誠心實意ヲ以テスルニア  
ラサレハ。此百露叛黨ヲ鎮撫シ平和ニ帰スルハ

易事ニアラス。

葡王ヨア一ノ弟四子ヘンリクハ新ニ邦

土ヲ覓見セントシテ久シクカヲ盡クセリ。然ル  
所以ハ其父王薨スルノ後ハ其兄必ラス王位ニ  
即クヘキヲ以テ已レハ別ニ不括ノ名譽ヲ天下  
ニ揚ント欲スルナリ。儲テヘンリクハ唯測量  
家ノ説ヲ聽キ。トトリタニ亞弗利加ノ沙漠ハ  
日光赫灼タル為ニ近ツキ難ケレト其陸地ハ南  
ニ突出スルヲ以テ堅艦ヲ浮ヘ之ニ航スヘシト  
シ。千四百十年ニ初テ其事ヲ行ヘリ。



航ス  
アトラス山

牙航

アトラス山ニ亜弗利加ハ其頃南方ニ航スルノ極  
度タリシニ二艘ノ帆船ヲ以テアトラス山ヲ過  
ル一六里ノ地ニ至リシニ非常ノ風濤ヲ畏レ終  
ニ其船艦ヲ轉ス故ニヘンリツク未ク功ヲ奏ス  
ルヲ得ス依テ其後準備スル一十年ヨアンコン  
サルヒユスト称スル豪勇ナル航海人ヲ以テ首  
長トシ新ニ船ヲ造リ之ヲ賤シ激浪ヲ冒シテア  
トラスヲ過ル四百二十里ニ達セシカトモ偶ヘ  
ンリツク蕩スルニ際シ未頭國ヲ蔑見スル志業  
モ共ニ廢絶セリ

見  
アトラス山

時世既ニ移リ葡王アルホンシユ五世ハ内乱ノ  
騷擾ヲ顧ミス再ヒヘンリツクノ遺緒ヲ緝キフ  
エルドニ亜弗利加ノ岬名西海岸岬ヨリサントカタレ  
ンニ至ルマテ遍ネク西弗利加海岸ノ大部落ヲ  
巡廻シギネア西亞弗利加海濱ノ地名ニ於テ西モール人ト互  
市セルト其準備ヲ為セリ  
アンホンシユノ後ヨアン一世葡國ヲ治ムルニ  
當テヤコパカニユスニ依頼シコンゴヲ蔑見シ  
ニール高名ナル河ノ源トサールノ源トサールニ亞弗利加河名洋溢  
スル激浪ヲ冒シテ教里陸路ニ方テ進行セリ

航ス  
アトラス山



抑モキリストフエルゴロンビユス氏ハ既ニ述  
 へタル如ク舟ヲ艤シテ始テフロリダ亞墨利加合衆國ノ  
 半島ノヲ復見シ其後カスチリ王ヘルジナンノ  
 時ニ當テヒスパニオラ亞墨利加ノ一チー  
 キエバ亞墨利加ノ最モ大ナル者チル島トニ及一リ然ル  
 ニ葡人ハ媚嫉ノ性アル者多ク此ノ如キ航海ノ  
 進歩セシヲ見テカスチリ人ヲシテ斯ノ拳ニ利  
 スル無カラシメント欲シバルトロムース、デア  
 シエス葡ノ高名ナルト云フ人リスボン葡都ノ  
 港ヨリ進航ニ航亞弗利加ノ海岸ニ浴テ極末ノ崎岬

ニ向ヒシニ難風ニ逢ヒ止ムヲ得ス歸郷シテ國  
 王ニ其海路ノ事ヲ奏セリ依テ此ノ崎岬ノ危険  
 ニシテ歸郷セシヲ以テ之ヲビエイト名ツケ  
 リ然レモ葡王ハ其語ヲ更ニ高尚ニシテ之ニ命  
 シテ喜望峯ト云ヘリ喜望峯ハ葡語ニテハカボ  
 ー、ズ、ボン、エスペランズニシテ今猶用ユル所ナ  
 リ  
 ガアンユスハサンフランソアー宗ノ教師フン  
 トニユストト稱スル豪氣ノ者ヲ同伴セシガ此人ハ  
 陸路ニ就キテ亞弗利加ノ國境ヲ極ノ壺ニ亞弗



利加全洲ヲ巡行セシノミナラス亞細亞ノ諸部  
ニ及ヒ長旅ノ後終ニゼリユサルルヲ過キリス  
ボニニ歸リ國王ニ再航ノ事ヲ請ヒシハ實ニ驚  
クヘシ然ルニ王ハ元亞弗利加及ヒ亞細亞地方  
ノ時勢ニ兼シテサンフランアノ宗ヨリ出身  
セシ人ナレハ能ク其言ヲ納シ再ヒ航海ノ議ヲ  
起セリ然レ其費用夥多ナルニ因リ最モ便宜  
ノ方法ヲ以テシ亞弗利加亞細亞ヲ精細歴檢セ  
シカ為ベイトルコフサラニユストアルホンシ  
エバヤノ二人ヲ撰用セリ此二人ハ能ク亞刺

伯語ニ習熟セリ是ニ於テリスボニヨリナール  
ル今ノ以テ太里ノロドスノ細島名土耳其及ヒベルサ  
ルニ向テ既日土ノカイロノ都ニ進發シ該  
地ニ於テ相分レバヤノハエチオビーニ行キタ  
ルニ茲ニテ客死セリ但シコフ井ラニユスハオ  
ルミユノ海峽ヲ過キ印土ノカリキユ  
ニ至リシニ國王ノ書翰ヲ得タリ其言ニ亞弗利  
加ヲ通觀セサレハ敢テ歸ル可ラスト記セリコ  
フ井ラニユス既ニエチオビー既日土ノ南ニア  
方ニ至リシ時國王ハ其膽略ト智トニ感シ之



葡王五子  
利加諸地  
ノ事

ニ約スルニ其少女ニ昏スルヲ以テシ許多ノ園  
圃ヲ共ヘ其租稅ヲ収納セシムコフ并ラニユス  
ハ既ニエチオビ」ヲ去リ詳明ニ亞細亞及ヒ亞  
弗利加諸地ノ地理ヲ記シ之ヲ葡王ニ奏進セリ  
其奏語中ニ東方ニ當レル貿易市街中カリキユ  
」ノ城市ノ人民ハ黄色ニノ氣力乏シク  
礼儀放肆ナリ上半身ヲ裸露シ腰ニ金彩アル紫  
色ノ縫帛ヲ纏ヒ腕ニ連珠ヲ懸ケ肩ニ劍ヲ負フ  
一婦ニ致夫アリ故ニ生子モ甚ク多シ因テ夫ハ  
孰レカ已レノ子ナルヤヲ知ラサルヲ以テ族名  
ヲ共ヘス已レノ姉妹ノ生ム所ノ者ニ遺產ヲ授  
ク又エチオビ人ハ漆黒色人種ニシテ甚ク廣  
ク蔓延セリ抑モモール人ハヨードン宗ニ由テ  
風俗ヲ破ル故ニ基督ノ名跡ヲ知レヒ精密ニ其  
法教ヲ守ルニアラス國王ハ多數ノ兵卒ヲ養フ  
ト  
此奏ヲ得ルノ後未タ久シカラスシテ葡王ヨア  
ン二世ハ殂落セリ實ニ千四百五十九年ナリ其  
姪嗣エマニユエル氏ハ能ク其志ヲ緝キ常ニ亞  
弗利加ヲ超ヘ東印土ニ至ル一キ路程ノ事ニ思



ツスルガ東亞  
旅行

念ヲ凝ラセシニ諸臣ノ議論沸騰シ多クハ其役ノ至難タルヲ述テ曰ク此行旅ハ許多ノ危難ヲ冒シ莫大ノ賤用ヲ費サハルヲ得ス能ク其志ヲ達スレハ亞弗利加濱ヲ覓見スルニ因テ聊カ利益ト采名トヲ得ヘキニ似タリト虽他人ニ先ク之ヲ着手スルハ頗ル狂愚ニ似タリ夫レ葡領ノ地ハ廣漠ノ地多ク之ヲ開墾スルニ人カヲ用ユルノ亦極テ多シ何ゾ遠ク航海シテ新ニ他方ノ境土ニ殖民シ自國ヲ空シクスルヲ須ヒン且ツ利益ノ事ニ着目スルハ自國ヲ盛ニスルヲ以テ百害隨テ生シ人民ヲ侵蝕シテ其膏血ヲ浚スルニ至ルモ必ラスシモ成功ヲ期シ難カルヘシト或ハ之ニ及シテ曰ク夫レ新ニ未知國ヲ覓見スルハ決シテ後悔スヘキ理ナシ後未必テス國王ノ府庫充實シ葡國ハ外國ノ為ニ益ヲ得ル事盛大ニ至ルヘシ蓋シ後來ノ成功ハ必ラス前次ノ危難ニ因テ生スル者ナレハ凡ソ庸人ノ危疑ヲ抱ク如クナラハ何ノ時カ能ク大志ヲ果スヲ得ンヤト

王ハ最後ノ議論ニ從ヒ急ニ堅艦四艘ヲ整備シ



水夫及ヒ兵卒百六十人ヲ載セワスキユスガマ  
 夫總督ト為シ其同胞ボリユスガマ及ヒニ  
 一リスクリユスヲ副督タラシメ千四百九十  
 七年七月十日ヲ以テ解纜セリ此人々ノ親族朋  
 友ハ其航海萬里風濤ノ險ヲ冒シ未開ノ地ニ赴  
 クヲ以テ必ラス危難アラント深ク憂慮シ唯其  
 恙ナク歸来スルヲ希望セリ其船路ハ當今ヘ  
 スペリート海島アトランケツクノ上ニ在ルホルチ  
 エナケス島ニ赴クヲ豫定シ且カボデーアル  
 ドニ在ル岬名西濱ニ向フト宣言シ稍進テ舳艫

二

ヲ東ニ轉シ渺茫タル海面三月間陸地ヲ見ス既  
 ニシテ南ニ進行スル一十度始テ一地ヲ得タリ  
 因テ其穩靜慰樂スヘキ港中ニ停泊セシニ其土  
 民ハ裸體ニシテ毛髮短縮皮膚黃色ニシテ賣買  
 ニ従事スル者ナシ唯故釘野果家畜ヲ交易スル  
 一トモ蓋シガマ氏ハヘレナノ神名ニ次テ此新港  
 ヲ度見シサントシヤコブノ太古名ニ尋テ此海灘ヲ  
 經過シ更ニ必ラス喜望峰ノ外ヲ經ント欲シ心  
 ヲ勵マシテ益前行ス然レモ風波ノ為ニ揺蕩セ  
 ラレ人々心ニ安全ヲ保チ得サルヲ期ス是ニ於



テ満船悉ク騒擾シ或ハ曰ク此ノ避ク可ラサル  
死地ニ進行モ此ノ堪ヘ難キ暑熱恐ルヘキ暴雨  
ヲ冒シテ久シク大洋ニ漂蕩スルハ抑モ何等ノ  
租豪ノ實ニ狂暴ト謂フヘシ況ンヤ天然諸民ヲ  
限レルヲ鎖鑰スル如キ險難ヲ侵シ淹滞スルヲ  
ヤ縱令此地ヨリ直ニ帰ルモ安全ヲ得ルハ或ハ  
能ハストガマ氏ハ船人ノ此怨言ヲ聽クト虽毅  
然トノ動カスシテ衆ヲ励マシテ曰ク汝等ハ婦  
女ノ如ク何ソ甚タ恐懼スルヤ速ニ此念ヲ消除  
スヘシ今將ニ成功ニ壘トシ不朽ノ名ヲ遺スヘ  
キニ當ル勉テ恐懼ノ念ヲ絶ツヘシト

此ノ時衆皆寧ロ一人ヲ殺シテ衆人ヲ全クセン  
ト思慮シ共ニ奮起スレトモボトリユスガマノ  
言ニ因テ僅カニ鎮静シタリ是ニ於テ其魁タル  
水夫ヲ獄ニ入レタリ然レモワスキユス氏ハ險  
難ヲ冒シ午親ラ舵ヲ執テ遂ニ喜望峰ノ海路ニ  
倚リ其舟ヲ馳セテ海岸ニ浴フヲ五十里ニシテ  
一港ヲ得タリ之ヲサントブラシユスト称ス其  
中央ニ一島アリ海牛之ニ扱ツ因テ上陸モテ暫  
ク旅況ヲ慰セシニ他方ノ亞弗利加人種ニ同シ



キ者此ニ住居シ皆裸体ニシテ樹皮ヲ以テ陰部ヲ掩フ

(三)

其後サンギユバル以亞弗利加東方ノ地名紀元海

ニ至ルニ海底ノ殊ニ深キト逆浪トノ為ニ船歩

迅速ナルヲ得ス因テワウハラト云フ高名ナ

ル城市ニ停泊セシニ其地ノ居民ハ往時ノ猙獰

ナルニ似ス女ハ銅ヲ以テ製スル腕環ヲ穿テ男

ハ錫ヲ以テ鞞固シタル劍ヲ佩テ其言語ハ通シ

難シト虽一土民亞刺伯語ヲ以テ述テ曰ク是必

ラス其國王之ヲ戮セスシテ未用ノ此地ニ移居

セシメシカ為ニリスボンヨリ攷テシ者ナルハ

シ是ニ於テガマハ居民ノ言語品行及ヒ海濱ノ

景況ヲ知シカ為ニ船中ノ二人ヲ上陸セシメタ

リ其餘敗血病ト空氣及ヒ草木ノ異常ナルト食

物ノ異ナルト長旅ノ困難トニ由テ死亡スル者

多シ

ガマ氏ソフハラニ在ルハ一周月ニメ其後モ

サンビツクト稱スル城市ニ進行ス此地ハ小島

中ニ在テ中線ヨリ南五十度ナレトモ通商ノ盛

大ナルカ為ニ名ヲ得タリ其市民ハ金ヲ以テ維



ヒタル水綿衣ヲ服シ頭ヲ蓋フニ巨大ノ布帽ヲ以テシ肩ニ劍ヲ負ヒ左手ニ插ヲ持シ此ノ如クニノ小艇ニ掉シテガマノ船傍ニ到リタルヲ以テガマハ之ヲ延テ茶シク饗待セシニ因リテモサンボックノ地ハキロアーサンゲバル海岸ニアル亜弗利加ノ島名王アブラヘムノ配下ナレトモ市尹ハ刺伯人ヲトサコト云フ者王命ヲ以テ其城市ヲ治ムルヲ聞キ得タリ又此人ノ周旋ニテガマハ按針ニ習熟セル者二人ヲ雇フテ葡船ヲ印土ニ通航スルノ便宜ヲ得タリ此幸福ヲ得シハモサンボックノ舟人ノ思想ニ出シ所ナリ抑モ此輩ハ原ト西土耳其人ナリケレハ後ニ及テ我輩ノ基督宗タルヲ知テ俄カニ交情ノ厚キヲ變シテ仇讎トナリ二人ノ按鍼者ハ舷ヨリ躍リ出シ游泳シテ逃去リケレハ葡人火ニ激怒シ舷ニ巨砲ヲ装シ船ヲモサンボックニ向テ放弾シサコノ頭ヲ傷シ波ニ從テ印土ニ航セリ此時彼ノ泳キ去タル二人ノ按鍼者ヨリ更ニ熟煉セル一舟子ヲ雇ヒタルニ其人ノ不信切ナルヲ前ノ二人ニ讓テス竊カニ葡人ヲ欺キ事ヲキロア



王ニ通セント謀レリ。此際ガマハキロアノ中ノ  
アビシオンニスニ於テハ基督宗ノ者ノ住居セシ  
改テ以テ之ニ頼テ僅カニ窮乏ヲ免カルヲ得  
タリ。

ガマノキロアノ向フヤ大風俄ニ起リ其港ヲ  
辨スル能ハス逃レ難キ厄難ニ罹リ心ニ謂テク  
キロアノニ赴クモ其王必ラスモサンビツリノ  
事ニ因テ怨ヲ含ムヘシト是ニ於テ意ヲ轉シテ  
他事ヲ復明セントシ舳ヲモンハサーニ向ケタ  
リモンバサーノ地タル岩石聳立シ周囲ハ大約

海ニ涵サレ險峻ナル一城市アリガマハ此ニ投  
錨シケレハ土民ハ之ヲ奇異ナリトシテ海洋ニ  
唱集セリ抑モ此時土耳其ニ拔群ナル舟師アリ  
テ葡ノ三船ヲ奪ハントシテ衆人相約シテ謀ヲ  
議セリガマノ船四艘ノ中一艘ハ兵卒ノ疾病ト  
死亡トノ為ニ大ニ衰弱セルヲ以テ既ニ之ヲ燒  
カント朝セリ然ルニ土耳其人ハ掠奪ヲ逞フセ  
ント欲シ此空船ニ乗り入りシニガマハ之ヲ視  
テ此騷擾ノ際我船誤テ近傍ノ低砂暗礁ニ觸レ  
ンヲ恐レテ港口ニ於テ速カニ帆ヲ卸シ錨ヲ



投セシノケレハ。土耳其其舟師ハ水夫ノ彼此ニ徘徊スルト。其海底ヲ契知スルトニ驚キ已レ掠奪ノ意ノ發露スルヲ悟テ自ラ舷外ニ出テモシバサ一人ノ船中ニ在リシ者ト共ニ水中ニ飛入り。游泳シテ陸ニ上リ去レリ。

爰ニ於テガマハ習熟セル按鍼者一人ト土耳其船二艘ト兵卒十三人トヲ獲タリ其餘ノ輩ハ皆舷外ニ逃ケ去レリ。時ニ此捕虜ノガマ氏ニ告知スルニノリンドト唱フル市街ハ中央線ニ在テ其通程遠カラス其君ハ外邦人ヲ遇スルニ甚タ懇切ナルヲ以テシケレハ。葡人ハ是ニ心ヲ勵マサレ直ニ其方面ニ馳ヒ向ヒシニ果シテ土耳其人ノ説ノ如ク其國王ハ高年ニシテ老衰セルヲ以テ其子ヲ遣テガマニ信物ヲ贈リ且懇親ノ意ヲ表シ又習熟ノ舟師ヲ假セリ因テ總カニ二十一日ヲ歴テ恙ナク船ヲ東印土ノカリキユツトニ達スルヲ得シト云フ。

此地ノ城市ハマラバールノ海濱ニ在テ無比ノ郁府ナリト虽一港ノ設ケナシ五月ノ末ニ當テ暴風大雨ノ為ニ天色變シ海面ノ激浪恰モ冰山



ノ如シ葡人カリキユツトヲ距ル一ニ里ノ所ニ  
マテ進行シタルニ適此時即ニ會スレトシ時ニ  
ノ致多ノ小船掉モ来リシカハガマハ捕虜一人  
ヲ陸ニ上ケ試ミタルニ土地ノ人之ヲ見テ其側  
ニ来リ親睦ノ意ヲ表シケレハ捕虜ハ之ヲ喜ヒ  
遂ニチユニス亞弗利加ノニ商人ニ逢フヲ得タ  
リ其一人ハモンサイダト稱シ西班牙語ニ習  
熟セリ此人捕虜ヲ其家ニ誘ヒ懇親ヲ盡シ其表  
情ヲ表シテ詳カニ土地人民ノ景況ヲガマニ説  
明セリ是ニ於テガマハモンサイダトニ頼テマ  
ラバール人ノサモリント稱スル王ノ許ニ二人  
ノ使者ヲ遣リ貴重ノ事件ヲ記シ永世ノ交誼ヲ  
求ムル葡王ノ書翰ヲ贈ランカ為ニ上陸セン  
ヲ請ヒシニサモリンハ此時方ニカリキユトヲ  
距ル一ニ里ノ地ニ小邑パングランニ居ルヲ以  
テニ使ハ其地ニ到リシニサモリンハ固ヨリ葡  
船ノ来ルヲ悦フニ固リガマノ請願ヲ許可シ其  
船ヲバングランニ停泊スヘキヲ指令セリ是ハ  
日々ノ風波ノ難無カラシメシカ為ナリ而シテガ  
マヲ其宮ニ導ンカ為ニカチユアルト稱スルバ



ンダラシノ捕亡長ヲ船ニ遣レリ此時ガマラハ毫  
モ其危難アルヲ顧ミズ敬テサモリンノ令ニ應  
セリ然レモ若シ不慮ノ禍難起ルハアラハ速カ  
ニ其船ヲ葡國ニ歸シ國王ニ請フニ他人ヲ再航  
セシメシトテ以テスヘシト守船者ニ命シ之ヲ  
留ノ且許多ノ輕舟ヲ海濱ニ列ネ已レノ逃歸ヲ  
待タシノ舟人ノ最モ用ユ堪ユル者十二人ヲ伴  
トセリ然ルニ印土ニ於テハ牛馬ヲ用ヒス故ニ  
若干ノ役夫ハガマラテ轎ニ載セテ之ヲ肩ニシ王  
所ニ至リシニ沿道一二ノカイマン印土ノ官名及ヒ

ブラノン同棉布ノ衣ヲ服シテ之ニ禮シ手がマ  
ヲ延テ宮中ニ導キシニ到ル所必ラス窓アリ一  
窓毎ニ衛兵十人ヲ備ノ最後ニ壯麗ナル正殿ニ  
進ム其床ハ貴重ノ絹ヲ以テ被ヒ壁ハ美麗ナル  
擅ヲ張り悉ク金ヲ以テ之ヲ綴リ室隅ニ階ヲ設  
ケ王公ノ坐スル臺アリサモリンハ金ヲ以テ蓄  
薇花ヲ繡縫シ目ヲ驚カス真珠環ヲ以テ結合シ  
タル白キ綿布ヲ服シ非常ニ修飾シタル卧床ニ  
横ハリ其頭ハ土耳其ノ製ニ倣ヒ美石ト共ニ金  
飾シタル帽ヲ戴キ腕ト脚トハ金鈎ヲ帶ヒ手足



ノ指ハ極テ貴キ金剛石ノ環ヲ貫ケリ又尠年ノ  
近侍立ツ換御ト名クル藥ヲ鉢ニ盛レリ此藥ハ  
印土ノ諸王呼吸ヲ爽快ニシ渴ヲ止ノ疾病ヲ避  
ク為ニ常ニ咬食スル所ナリサモリンハ皮膚黃  
赤色ニノ身體巨大極テ威望アリ

ガマハサモリンヨリ命ヒラレシ時訳官ヲ以テ  
口述セシノ葡王エマニユエルハ同等ノ諸王公  
ト契約ヲ結ハント欲シマラバール王ノ德望威  
カアルノ名聲世ニ傳播スルヲ以テ他ノ諸邦ニ  
先クテサモリン王ノ懇親ヲ得テ互ニ通商シテ

各利益ト光榮トヲ獲ンカ為ニ許多ノ艱難ヲ冒  
シ遠ク此地ニ来航セシ所以ヲ以テ其次テ王ノ  
書翰及ヒ一二ノ信物ヲ捧ケリ此書翰ハ亞刺伯  
語及ヒ葡語ヲ以テ記シタル者ナリ

サモリン王ハ彼此ノ為ニ大ニ喜悅シテ懇親ヲ  
表シ葡國ノ景況トガマノ路程ノ事トヲ尋問シ  
厚ク之ヲ饗應セリ此事忽チ民間ニ聞ヘシカハ  
夥シクカリキユツトニ寄留スル土耳其ノ商人  
等大ニ驚キ謂ク若シ新ニ航海セシ者此地ニ於  
テ貿易スルニ至ラハ必ラス已レ等ノ高利ヲ奪



土庫屋人  
ユラタニ  
カマ  
ヲ  
シ  
ス

ハルヘシト忽々妬忌ヲ生セシノミナラス。宗旨  
ノ異ナルニ由リ其恨最モ甚クシク相會シテ葡  
人ヲ苦シメントシ謀計ヲ設ケ共ニ王所ニ迫リ  
建言シテ曰ク彼輩ハ從來海賊ニノ良民ノ讎敵  
ナリ若シカリキユツトニ於テ之ト通商ヲ許サ  
ハ土耳其ノ諸商ハ皆閉店シテ歸郷スヘシ抑モ  
王ハ何故ニ遠國ヨリ来リタル一二ノ強盜ヲ毫  
モ疑ハス却テ之ヲ信親ナル故舊ノ上ニ加ヘ以  
テ便トナスヤト

マ  
コ  
シ  
ハ  
人  
葡  
人  
ヲ

人ノ為ニ煽動セラレ葡人ニ抗シテ土耳其人ヲ  
援ケント欲ス。此時若シモンサイグ氏力之ヲガ  
マニ告知スルナカリセハ殆ント其姦謀ニ陷  
ルベカリシニガマハ之ヲ聞キ間道ヨリ危急ヲ  
遁レ速カニ拔錨シタルニ海上ニテ一印土船ニ  
逢フ則チ其船ニ托シ一書ヲサモリシニ贈リ極  
テ其政ノ不正ヲ誹議シ然ル後陸上ニ遣シタル  
貨賂ヲ速ニ返却セラレシヲ請ヒシニサモリ  
シハ罪ヲ蒙刑シタル臣僕ニ委ネシノミ  
ガマハ此ノ如ク禍難ヲ免レシト虽其貨賂ヲ返



サレサルヲ以テ憤激シ親ラ兵ヲ整ヘマラバル  
ノ一船ヲ奪ヒ更ニ其船中ニヤラバール人六名  
ヲ捕ヒ以テ質トナシサモリニ已レノ遺シタ  
ル質賂ヲ返サレシヲ要シ且之ヲシテ葡王ニ  
答フル書翰ヲ齎スヲ促カセリ  
前ニ記シタルモンサイダーハカリキエツトニ  
於テ葡人ト親交セシヲ以テ禍ノ至ランヲ恐  
レ葡船中ニ遁レ入り其後葡國ニ至リ灌身シ安  
寧ニ生ヲ送レリ  
サモリン王ハマラバールニ在ル所ノ葡船ノ既

葡船家帰ル

(五)

ニ陸ヲ距ルヲ遠キヲ以テ之ヲ如何トモスル能  
ハス則チ小船六十艘ニ兵卒ヲ多載シ以テ去船  
ヲ追襲セシニ此小船ハ忽チ暴風ノ爲ニ吹キ散  
ラサレタリガマハカリキエツトヲ出テ家郷ニ  
向ヒ客遊二年ノ後則チ千四百九十九年ニ帰着  
スルヲ得タリガマハ丈夫ノ勇氣ヲ抱キ萬里  
不案内ノ海路ヲ經テ百難ヲ冒シ東印土ヲ度見  
セシ者ノ嚆矢ト云フ一シ  
其後葡人ハ足ヲ印土殊ニ臥亞アマラバールノ傍ニ  
島名ニ入ルト虽前ニ述ヘシガマノ後見ハ最モ



奇異ノ事トセリ。其故ハ千五百五年ニ於テ葡王  
 エマニエエル在位ノ三十年ニ葡國ノ一岬ロク  
 ハ、デ、シ、ン、ト、ラニ於テ。千三百年八月九日ニ記ス  
 ル三個ノ古碑ヲ掘リ出セシヲ以テナリ。此碑ハ  
 全面磨滅シテ分明ナラズト虽羅甸文字アリ一  
 ヲ其語ヲ譯スレハ。大畧左ノ如シ

汝西方ノ人若シ東方ニ生スル貨寶ヲ鑑定シ  
 得ハ此石ハ文字ト共ニ轉シ直立スヘシ其行  
 路ニ鉛絶斯印土ノタギユスノリユシノターニ  
 ト云フ大河アリト此事ハ實ニ奇異貨ヲ以テ

貨ニ易ヘ無數ノ珍品遠方ヨリ集来セン此事  
 永久無限ノ日月ヲ以テ證トス

此古碑ノ事歐羅巴洲ニ傳聞シリヌボンニ在ル  
 外國ノ商人其文ヲ寫シ去リ幾モナク佛蘭西以  
 太里波蘭獨逸ニ傳播シ碩學多識ノ人此識文ヲ  
 判決セシカ為ニ心ヲ盡セリ若シ其事ノ詐術ナ  
 ルハ度露セサレハ衆人皆シビラシ氏ノ東印土  
 ハ西方人民ノ航行ニ因テ度見セラルヘシト言  
 シ語ニ惑フヘシ然ルニ博學ナルカスバルフハレ  
 リエス氏左ノ説ヲ述フ是必ラス明徴アルナル



一シト

夫レ葡王エマニユエルガガマニ隔遠ノ地ヲ窮  
 ノ萬里ノ旅行ヲ遂ケシノシ片ハリスボンニ於  
 テアングリユス、ボリチアニユスノ門生ヘルミ  
 キユス、カヤジユスト稱スル有名ノ詩人生存セ  
 リ此人古昔ノ文字ヲ以テ三個ノ大理石碑ヲ製  
 セシム其辭ニ曰ク東印土ハ遂ニ葡王ノ管内ニ  
 属スヘシト此石碑ハ密ニシントテ葡國ノ街坊  
 ニ埋メシニ時移リ古色ヲ帯ノルニ及テカヤ、シ  
 ュス復タ其類ノ碑ヲ製シテ之ヲ田野ノ中ニ埋

藏シテ獨愀然ト喜ヒタリ後偶司稅吏衆客會食  
 ノ席ニ於テカヤジユスニ役セラレタル一鑄工  
 此地ニ秘寶アルヲ徴シ奇異ノ文字アル大理  
 石ノ事ヲ評告ス依テ衆客皆急ニ席ヲ退キ其地  
 ニ到リ其石ヲ視テシビラノ識文ヲ異トス此  
 時國王ハ其詐偽ナルヲ知ルト虽自ラ驚駭ス  
 ル態ニテ侍臣ヲシテ其碑文ヲ寫サシメ其碑ヲ  
 神物トシテ寶庫ノ中ニ秘藏セリト  
 葡人ハ其後ガマノ跡ヲ踐ミ再ヒ遠遊ヲ為シ未  
 タ幾ナラスシテ廣大ナル印土地方ヲ押領スル











葡人東印

葡人ハ既ニ東印土ニ航シ心ヲ盡シテ致年間ニ  
貿易ノ基礎ヲ定メ隣邦諸王國モ亦多ク附屬シ  
或ハ未タ從ハサル土地アレハ印土人ト通商シ  
テ莫大ノ貨財ヲ得テ其情願ヲ果スルヲ得タリ  
此際最モ利益アルハ日本ニ航セシメテナリ抑モ  
歐羅巴人誰カ始テ古來不知ノ日本ヲ發見セシ  
ヤ詳ナラス故ニ余モ亦未タ其正說ヲ記スルヲ  
得ス或人ノ說ニ舟師船師ヲ擧ケサレハ千五百  
三十九年ニ於テ葡人暴風ノ為ニ不圖日本ニ漂  
着セシメテアリトセリ又フランシスキユスサフ

維新史  
卷之五  
葡人東印

イー氏ヨシレ一南安國ノヨリ出セシ書翰ニハ夫

ヨリ五六年後ニアルヘシト決セリヨアネスベ  
トリユスマフリス氏トゼスイツト宗徒ヤコブ  
スツアニユス氏トハアントニユスガリエアニ  
ユス氏カ世界初觀ト云フ書ニ因テアントニユ  
スモタラフランシスキユスセイモレ及ヒアン  
トニユスペソー氏ノドバウレヨリ支那ニ航シ  
タル片烈風ノ為ニ日本島ニ漂着セシハ千五百  
四十二年ナリト記セシ說ニ從ヘリ又支那人日  
本人ノ久シク葡人ト通商セシハ疑ヒナシ抑モ

葡人東印



葡人何事...  
五十年...  
...

日本人ハ支那ヨリ分派セシナリ而ノ其後モ夕  
レセイモ<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>ロベソ<sup>レ</sup>氏ノ獲見ハマル<sup>レ</sup>子ニユ  
スアルボン<sup>レ</sup>シユソワ<sup>レ</sup>氏カ副王ト為リテ葡ヨ  
リ卧亜ニ来リシ片ナリト云フ

其後葡人ハ日本ニ交通スルノ基礎ヲ得タルハ  
後件ニ因ル日本ニア<sup>レ</sup>ゲルト称スル一少年ア  
リ追捕ノ苦難ヲ畏レテ僧寺ニ隠レタリシカ偶  
葡ノ一船来泊セシニ因リ夜中竊カニ来テフハン  
ユスニ會シ身ヲ托シダオルキユスアルフハレン  
シユスト称スル商人ニ伴テ出帆ノ機會ヲ待チ

フハシユスノ指令ニ從ヒ千五百四十七年麻六甲  
ニ遁逃シ洗禮ヲ請ヒケリ是ニ於テ麻六甲ノ教  
長等ハ教師ヨアンネスアルビユケルクニ一日  
本人ヲ教化スルノ衆ヲ歸セント謀リ之ヲ卧亜  
ニ遣リボ<sup>レ</sup>リユス、フハン、ヘツト、ヘトリ<sup>レ</sup>アゲロー  
フ<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>ノ<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>ヲ<sup>レ</sup>キ<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>フ<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>號<sup>レ</sup>ヲ<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>洗<sup>レ</sup>禮<sup>レ</sup>ス<sup>レ</sup>ヘ<sup>レ</sup>キ  
ヲ命セリ又コルネリスハザルト云フ者二人シ  
奴僕アリ一ヲヨアネスト名ケ一ヲアントニユ  
スト称セリ千五百四十八年十一月廿八日アン  
ゲルカ卧亜ニ於テ親ヲ筆セシ書翰ハゼスイワ



サ  
カ  
ラ  
シ  
キ  
事  
一  
七  
日  
本  
旅  
行  
ノ  
一  
部  
也

ト宗徒ノ著シタル日本書翰ト同シク一奴僕ノ  
事ノミヲ載セタリ今此事ヲ詳記セス唯セスイ  
ツト宗ノ日本ニ入ルノ手段ニ及ヒ次ニ之カ羅  
馬宗ニ托シテ断然殉教セシ者ノ事蹟ヲ正實ニ  
説明スヘシ

前ニ述ヘタルアングェルハ日本ノ勢威ヲ皇張シ  
ゼスイツト宗ノアランシスキユスサヒリウス  
氏ヨスミユスチユレンシス氏及ヒヨアネスフ  
エルナンデス氏ヲシテ臥亞ヨリ麻六甲ニ向ヒ  
遂ニ日本ニ至ラシノタリサヒリウス氏ノヨニ

ンブリカールニ在ルゼスイツト宗徒ニ贈リシ手  
簡ニ曰ク己レハ從來日本ニ至ルノ希望アルヲ  
以テ麻六甲ノ文那船ニ乘リ出度セリ其緣由ハ  
帝ニアングェルノ為ノミナラス日本ヨリ来遊ス  
ルノ徒ニ便ナラシメ且日本ヨリ麻六甲ニ至ル  
者ハ葡商ニ謬ラレ基督教ノ本旨ヲ知ラス邪道  
ニ導カルヲ知レハナリ余ノ日本ニ在ルヤ一  
諸候ノ令ニ因テ上ニ記スル葡人ヲ一家ニ寄寓  
セシニ其家ニ畏ルヘキ靈鬼アリ其衣服ヲ脱シ  
奇怪ノ形象ヲ現シ其聲啾々トシテ聽ニ忌ヒ難



シ之ニ由テ之ヲ思想スルニ是果シテ何物ナル  
ヲ知ラス唯其家ニ存在スル十字架アルヲ以テ  
考フルニ地獄ニ於テ蒸熟ニ苦ム惡魔ナルニ  
ト定メシナリ故ニ日本人ハ十字架ノ効力ニ感  
シ之ヲ擬造シ滿街浴戸十字架アリト  
日本海路ノ事ニ由テ再ヒサヒリウス氏ノ事ヲ  
説クヘシ前ニ述ヘタル支那船ハ日本ニ到ラン  
トシテ徒ラニ往還シ諸島ニ漂泊シテ時日ヲ費  
ヤシ又那地方ノカントニ港ニ入りシカ順風ナ  
ルヲ以テフインフォイ

支那地名ニ於テ冬ヲ凌カン

トシテ舟ヲ駛セタリ抑支那船ハ其後面ニ佛像  
ヲ安置シ其前ニ蠟燭ヲ點シ香料ヲ焚キ禽鳥ヲ  
捧ケ食物ヲ奠シ屢靈ヲ祈リ圍ヲ以テ禍福ヲ定  
ム又此船既ニフインフォイニ向ヒシニ或船ヨ  
リシンフールノ準備ハ海賊ノ為ニ奪ハレシヲ  
聞キケレト海路ニ於テ風ニ沮セラレ本意ニ背  
テ日本ニ赴キ聖教主僧ノ生國鹿兒島ニ至レリ  
サヒウス氏ハ千五百四十九年八月上陸シ主僧  
ノ父母及ヒ親族之ヲ厚待セシト虽其異宗ナル  
ヲ惡テ之ヲ棄絶シ只萬里ノ客路及ヒ印土ノ事



一書八卷  
即此書也  
三説  
二

情ヲ探索シ奇聞ヲ傳ヘントスルニ志セリ此風  
説薩摩候ノ耳ニ入り主僧ヲ召サレ因テ主僧ハ  
葡人ノ印土地ヲ法令ト兵カトヲ以テ之ヲ壓制  
スルノ状又麻六甲及ヒ臥亞マラバドノ傍ニア  
ノ市ノ景況并ニゼスイツト宗徒モ共ニ航行シ  
タルヲ明述セリ

六

其後ゼスイツト宗ノサヒリウス氏及ヒチエレ  
ンシスハ薩摩候ニ説明スルニ羅馬ノ教旨ヲ以  
テシ又日本ノ僧侶ト論辯シサヒリウス氏ノ陳  
述スル所實ニ奇ヲ極メテ能ク羅馬宗ヲ鞏固ニ  
シ或ハ十字架ノ信ヲ以テ癩ヲ病ム人ヲ全愈セ  
シノ且己レノ手ヲ以テ病者ヲ撫テ痲痺ヲ治ノ  
死者ヲ起シ地獄ニ墮ル者ヲ救ヒ日本ニ於テゼ  
スイツト及ヒ其他ノ羅馬宗徒ノ大願ヲ遂ケシ  
ノタリ其後ノ事蹟モ記録ナキニアラス讀ム者  
宜シク日本ヨリゼスイツト宗ニ興フル書簡ニ  
就テ搜索スヘシ而ノ其書簡ノ時日ト地名トハ  
リヨシロスンジリシゲン及ヒコレニ於テ後  
兎スルアリ  
抑モゼスイツト宗サヒリウス氏コスミユス氏



チユレンシス氏ノ三師其他相繼キ日本ニ航シ  
タル者ノ外ニ千五百八十五年フランシスコバ  
イスト称スル兵将サンクタクリユス船ニ乗リ  
瑪港ヲ出發セシ事モ亦著名ナリ然ルニ此船ハ  
ラントント称スル街坊ニ沿テ深サ六尋ニシテ  
其底ハ砂石ナル所ヲ駛セ海門ニ至ル其外ハ甚  
ク深シラントニ入ントスルニ左ニ一灣アリ  
風勢モ亦甚烈船ハ激波ヲ冒シテ進ムニ非サレ  
ハ其街坊ノ傍ヲ經過スルヲ得ヌ曉ニ及フ頃  
ランコ島ヲ見ル此島地勢甚ク高ク白岩聳立シ

フランシスコバイン  
長崎ニ至ル

テ海面ニ顕レタリ而シテ其後又ラモント呼フ平  
地ヲ見ル此地ハ東北西南共ニ海ニ突出スル兩  
箇ノ山頂アルヲ以テ甚ク辨知シ易シフランシ  
スコバインス氏ハ路ヲ北東ニ取り或ハ緩漫ナル  
波ニ漂ヒ或ハ雷鳴電光ヲ冒シ久クシテ陸ヲ隔  
ル一六七里支那地方ヲ見ルヲ得タリ最後ニ姉  
妹島臺灣及ヒ三王島ニ近ツキ此所ニ於テ大風  
ニ遇ヒ殆ント生命ヲ失ハントス其激浪天ニ接  
シ風ハ始ハ北東ナリシカ後北西ニ變ス故ニバ  
イス氏ハ一晝夜唯死ヲ待ツノミ然ルモ幸ニソ



風漸ク鎮靜セシテ以テ進行シ臺灣ニ至リケレ  
 ハ四五十尋ノ海底ハ泥土ナル所ニ逢ヘリ  
 天公ノ特別ノ前兆ヲ降シテ暴風ヲ明示スルハ  
 實ニ徵スヘシトス詳ニ之ヲ謂ハ地平線ニ雙  
 濃色ノ小虹ヲ現スルナリ然レモ其虹ハ他ノ二  
 虹ノ輪ト為リ其末端ニ至テハ甚タ巨大ナリ故  
 ニバイス氏ハ此前兆ニ由テ舟中種々ノ綱繩ヲ  
 緊張シ風波ヲ冒セシテ以テ難風ニ堪ユルヲ  
 得タリ曾テ喜望峰ノ傍ニ於テ掌ニ均シキ一雲  
 片現ハレ幾タモナク暴風逆濤忽チ起リケレモ

バイス氏ハソノマクマ蓋シ文ト稱スル島ニ向ヒ

百里ニシテ偶然黑白ノ海鳥許多ヲ見タリ此鳥

ハ葡國ニ於テアルカトラスト名クル者ニテ魚

ヲ食シテ育スルナリ又ノアクマノ前ニ當テ一

暗礁アリ嶋形ハ四面峻岩聳立シ南西ニ當テニ

箇ノ圓丘ヲ見ル此他ノ島嶼ニ風笛ニ似タル奇

石アリバイス氏ハ之ニ浴テ行クニ二里三十一

度ニ至リカベキエマト稱スル許多ノ岩礁ニテ

圍ミタル所ニ向ヘ天草山トカフハ口長崎ノ

南ニアリ島ノ崎岬ヲ見タリ此崎岬ニハ高松アリ繁茂

繁茂



シ且波浪ノ為ニ碎カレタル石盤アルヲ以テ甚  
ク著明ナリシガ方今ハ長崎ノ大寺院ノ屋宇ニ  
類スル材木ヲ以テ長崎ノ方ニ面シ内ヲ設ケ  
リ其後荷蘭人モ亦此港ニ航シ通商ヲ勉メタリ  
蓋シ荷蘭人叢時ハノール、ウエール、グレシツク、  
コニングスベルグ、リガール、フェルデホマルク  
其他西班牙、佛蘭西、英吉利及ヒ近隣ノ國民ト和  
親シ其最モ遠キ者ハ地中海ノゲニコアールリホ  
ルノール、ノシナール及ヒシルマリニ過キサリシナ  
リ。

蘭人航路  
又ハ  
原

抑モ荷蘭人航海ノ事實ヲ擧クレハ西班牙人ト  
荷蘭合衆國ト戦争ノ際、西班牙ハ荷蘭ノ平生其  
國ノ元氣トスル航海通商ノ事ヲ妨クレハ輒ク  
其兵勢ヲ挫キ其自由ヲ剥スヘシト思想シ為ニ  
嚴刻ナル榜書ヲ掲ケ、荷蘭ノ商人其貨財ヲ西班  
牙ニ齎スルヲ禁止セリ然レモ西班牙人ハ猶商  
地ヲ印土ニ有セシヲ以テ歐羅巴諸國ノ人ハ皆  
来テ居ヲ占メサルヲ得ス、荷蘭人ハ既ニ其航路  
ヲ妨ケラレシヲ以テ別ニ緊要ノ目的ヲ立ント  
為ス、且東印土ニ於テハ從來西班牙ノ護市ノ兵



第八卷後  
二九

二九

無キヲ以テ此地ニ通商セントス又アヒアン南安  
カト稱スル城市ハ荷蘭ヲ距ル一千二百三十五  
里ニ過キス之ニ沿ヒ日本ニ向ヘハ魯西亞ト韃  
韃ノ背面ニ當リ便路ヲ得ルトナシヤコッブハル  
ク氏キリストトフユルルチユス氏バルタザ  
ルローセロン氏ヤンヤンソーン氏カール  
氏及ヒジルクフンオス氏等四艘ノ船ヲ装シ千  
五百九十四年六月五日ヲ以テ解纜セリウイ  
レムバレンソーン氏船長ト為リ海路ヲ指揮ス  
然ルニノフハセルブラ北氷海ニアル魯西亞ノ島名ニ至リ嚴寒

第八卷後  
二九

堅氷ニ固ミ事ヲ遂クルヲ得スシテ船ヲ返セリ  
第二回ハウイルレムバレンソーン氏トヤコブ  
ヘームスケルヲ氏ヲ以テ長トシテ帆船七艘ヲ  
以テ海路ヲ轉シテ出度セリ然ルニ又不幸ニソ  
志ヲ達スルニ能ハス四月ト十六日ヲ經テ空  
シクマース河名ニ還レリ第三回ニ至テ始テ其志  
ヲ達スレヒ歸路一船ハ氷海ニ於テ進ムヲ得  
スノフハセルブラニ於テ冬ヲ送り一船ノミ歸郷  
セリ  
印土ニ向テ北方ノ海路ハ氷海ノ為ニ沮絶セラ



レ船中ノ者幾許ノ危難ヲ經レテ依然トノ航海  
ノ志ヲ變セズ。此巨魁ハコルネリスホートマン  
氏ナリ。此人西班牙人ノ東印土ニ通商スルニ從  
事スルノ久シキヲ以テ終ニ鞏固ナル一基礎ヲ  
得タリ。其故ハ曾テ事故アリ。土耳其人ニ捕ハレ  
タルヲ以テ大金ヲ出スモ其身ヲ贖フヲ得ズ。依  
テ東印土商法ニ関スル機密ノ事ヲ搜索シ以テ  
アムステルダム商ノ扶助ヲ請ヘリ。此ニ依テ利  
潤ヲ得ルハ六キユルデンヨリ百キユルデンニ  
至レリ。

船中ノ者幾許ノ危難ヲ經レテ依然トノ航海

ヘンリツクヒユツゲン氏。レイニールバユール氏。  
ビーテルハツセラール氏。ヤンヤンヌソール氏。  
カーレルデオード氏。ヤンボツベン氏。ヘンリツ  
クホイク氏。ジルクファンオス氏。シヘルドペーテ  
ルスツーン氏。セルム及ヒヒアレンドゲン。ゴロー  
テンホイス氏等。帆船四艘ヲ装シ前ニ述フルホ  
ートマン氏ヲ以テ船長トシ印土ニ向ヒケルカ  
二年四ケ月ヲ經テ少利ヲ得テテキセル。  
エエテルセルノロニアニ歸航セリ。  
北海ノ島名ニ歸航セリ。  
此初役ハ各人互ニ協和セサルヲ以テ利ヲ得サ

荷蘭ノ内海



レトモアムステルダムノ商人フイレンセンフハン  
ブロクホルスト氏シモンヤンスフイレンホル  
トイン氏ゲファールトジルクスフイレン氏コルネ  
リスフハンカムペン氏ヤコフブトーマスフイレン  
氏エルレルトシモンスフイレン氏ヨンフェイレン及  
ヒヤンハルマンスフイレン氏等始テ此事ニ着手  
スルニ及テ航海ノ法確然ト一定シ前キニ航セ  
シ者ハ協力同心スルノ便ナルヲ察シヤコフツア  
フン子ワク氏ヲ以テ長ト為シ再ヒ船ハ艘ヲ出  
シ其未夕帰ラサルニ先タツ二月復タステイフ

エレンフハンデルハーゲン氏ヲ以テ長トナシ帆船  
三艘ヲ度シタリ

此時錫蘭ニ於テモ亦バルトハザルムーフエロ  
ン氏及ヒアドリヤンレンフイレン氏等相尋テ  
船ヲ出シロツテルダムノ他會社モ亦之ニ應シ

日ニ人ヲ激動シ此他ブラバンデル荷蘭ノ黨モ  
アムステルダムニ結社シ亦其航路ニ沿テ船四  
艘ヲ装スル為ニ財ヲ出シケレハ前ノ諸商モ亦

之ニ副シテ帆船四艘ヲ装出ス  
東印土ノ通商ハ西班牙王ノ意ニ及シテ日々昌

此船ハ  
アムステルダム  
ニ出ル

此船ハ  
アムステルダム  
ニ出ル



東洋通商大社  
設立の経緯  
其の要旨

荷蘭政府  
設立の経緯  
其の要旨

①

盛ナリ然レ臣買取スル者ト賣出スル者トノ此  
港ニ出入スル者皆其力ヲ合セス各其意ヲ異ニ  
スルヨリ甚ク矛盾スルノ弊アリ  
是ニ於テ荷蘭政府ハ此事ヲ熟議シ諸商人合體  
スルノ善事ナルヲ知り其決議セシ事ヲ宣讀シ  
テ東印土高法準備ノ為ニ醵金セサルヲ得サ  
シノ幾クモ無ク一時ニ金六十六トシヲ集メ得  
タリ則チ更ニ加フルニ五千ギエルデンヲ以テ  
シ之ヲ資本ト為シ其總督タルヘキ者ヲ撰擧シ  
其主任スルノ年期ヲ定メリ又社員集會スル所

ノ室ハ最モ航海ニ便ナル街坊ニアリテ本局ヲ  
アムステルダム及ヒミッテルビエルグニ置ク  
アムステルダムニ議員八人ミッテルビエルグ  
議員四人ヲ置ク更ニ一二名ノ重大事件ヲ擔當  
スル者ヲ定ム

東洋通商大社  
設立の経緯  
其の要旨

此會社ハ數年ナラズシテ得ル所ノ利益ニ因テ  
大ニ權勢ヲ得印土人ヲシテ西班牙人ノ傲慢ヲ  
厭ヒ專ラ荷蘭人ト貿易センカ為ニ契約ヲ結ビ  
其港ヲ開キ強兵以テ之ヲ護シ他人ヲ屈服セシ  
ムルニ至ル而シテ此ノ如ク印土ノ北海濱ニ於テ



バタビア領事  
置

強盛ヲ致セシハ此新制ヲ以テ緊要トス是ニ於  
テ瓜哇ハ最モ之ニ便ナルノ地ナレハ其伯帶比  
亞ト稱スル市街ニ城郭ヲ築キ丁壯千二百人ヲ  
備ヒ瓜哇帝ノ未襲スルヲ禦ク抑モ伯帶比亞ニ  
ハ從來其酋長ナル者王公ニ比スルノ政府ヲ設  
ケ以テ通商軍旅和親等重大事件ヲ議セシニ今  
既ニ其權ヲ奪ハルニ及テ酋長モ亦唯此地ニ未  
寓スルノミ抑モ荷蘭人ハ衆多ノ人民ト通商ス  
レ且一旦事アルニ當テ戦争スルニ至レハ必勝  
ヲ奏シ武ヲ野蠻人民ニ示スニ足ルヘキナリ之

日本往復船  
ウツラ  
三回往復シテ入

伯帶比亞ヨリ日本ニ往復スル印土船僅少  
ナラス三年毎ニ東印土商會ヨリ一使節ヲ  
送り莫大ナル進物ヲ日本將軍ニ獻スルナ  
リ其華麗ナルヲ驚クニ堪タリ又記録スル  
ニ堪タリ天工物アリ又人工物アリ又西班  
牙及暹羅又羅馬政府ヨリ現著ナル進物ヲ  
捧ケリ皆本式ニ交ヲ結フ所ナリ然ルニ何  
故ニヤ一國ヘモ日本ヨリ使節ヲ送ルナ  
シ唯數十年前ニ文那ヘ一使ヲ送リタルア  
リ又千五百八十二年西班牙及羅馬ニ有馬

羅馬使者送



及ヒ大村候ノ血族共ニ十五且ユリアニユ  
ス中浦及マルニチユス原及外ニ從僕二人  
合シテ六人洋教ヲ奉スルノ見込ニテ出立  
セリ印土派遣宣教師アレキサデハハリ  
グナニユスルノ所業ヲ觀視スルヨリ此市年  
ハ歐羅巴ノ結構ナル一ニ心醉セリ此好奇  
ノ意ヨリ大旅行ヲ企テタリ然レハハリグ  
ナニユスルハ唯耶蘇教ヲ以テ釋教ニ入替  
ヒ此遠來ノ貴人ヲ更ニ貴カラシメテ勉メリ  
チエアニユス氏此事ヲ有名ナル歴史第八十一卷

ニ記セリ

余日本使節ノ長路ヲ經テ羅馬ニ至ルノ履歷ヲ  
記スルノ前ニ於テフランシスコバイス氏ノ長  
崎ニ至リタル話ノ續キヲ説クヘシ千八百八十  
六年三月二十日長崎ヨリ出帆セリ北東風強吹  
スカハルツス島ヲ經過シテコイギーン及五島  
ニ至ルニ大ニ靜穩ナリ三宅島ト支那陸地トノ  
間ニ大州アリ是ニ於テ大ニ北東ヨリ風強吹ス  
但シ雲ハ南西角ヨリ驅逐セラル舟士皆驚キ懼  
レ為ス所ヲ知ラス唯某氏アリ曰ク此海ニハ辱







七人姉妹又各  
七人兄弟

ヲ経テ支那陸地一向一リ遠カラスノハレルヲ  
ヲ見ル赤色ノ石アリシノゴン港ニ突出スレキ  
ユエオニキユエノニ近接シテ高島アリ遙カニ  
緯ユニ十五度ニアリ此地ニテ久シク浮泳セル  
セスベトネン六足ノ名カ及白色ノ貝ヲ見ル但シ  
十五里ヲ過ルニ次第ニ減クセリ是ニ於テセ  
レゲシユステルス七人姉妹ノ義島名ヲ見ル是其形  
状ト員數トニ因テ此名アルナリ

前面一島アリ中點大ニ尖ル其西脚ニ一礁アリ  
氷柱状ナリ北東ニ黒色礁アリ此七島ヲ見サル

ニ及テ高ク階圓ナル島アリエコトト名ク樹木  
多クノ黒色ナリリンスコトラン更ニ北東ニ向

一エコトト種ケ島トノ間ヲ経海水極テ深クノ  
暗礁ナシ一山アリ以太利ノ一セヒウス及應西

里ノエトナニ異ナラス盛ニ火ヲ噴シ煙ヲ出  
ス海上ヨリ遙カニ之ヲ望ム一シ但シ種ケ島ハ

長サ八里西ニ港アリ岩礁多シ島ノ低地ニ丘陵  
多シ大ナル松樹アリ種ケ島ハ長サ距ル一八里北ニ

帝國日本アリエビユキシ一入海アリ危険ヲ経  
テ之ニ入レハ大ニ静穏ナリ瑪港ヲ辭スルヨリ



十一日ニ日本海岸ニ着セリ。

再ヒ日本使節 **有馬及大村** シヨウイリ 及ミカドルシシガ

ノ旅行ヲ説クヘシ。印土西班牙以太利及歐羅巴

彼此ノ地ヲ經歷セリ。危難ノ水路ヲ経テ世界ノ

遠隔地ヨリ王命ヲ奉シテ来ルヲ見テ皆驚愕セ

リ。既ニノ二月二十日ニ長崎ニ着シ。恐ルヘキ颯

風ノ後十八日ノ京都ニ達セリ。船中ニ在ル九

月ニノ復ヒ出帆セリ。蘇門答刺ト新嘉波トノ間

ニ別アリ。其危険ナル一麻六甲ニ譲ラス。曾テ一

船瀆ニ衝突シ。嗎哈黨ノ押領スル所トナレリ。ソ

ナピユルヨリ進テ。コンシオンニ着セリ。此市ニ

全一年居留セリ。 **臥亞** ニ向テ退去セシ。印土ノ

亞王フランキシユスマスカルグナ氏大ニ之ヲ

響應シ。終ニサントヤコツプ 号船ニ乘リ進行シノ

ニウスロデリリキユスニ導カル。盖シハリグナ

ニユス **臥亞**ニ在留スヘキ命ヲ受クレハナリ。

五月十三日シントヘレサニ着セリ。此島ハ周囲

小ナレ。巨樹木繁茂シ。野菜多ク。野獸アリ。海ニ魚

多ク。造化ノ勞苦セル舟士ヲ慰ムル為ニ。尤モ注

意シテ設クル所ノ好地ナリ。

五

コトハ...

臥亞

コトハ...



抑モ此島名アル源ハ曾テ葡萄牙人。五月二十一  
 日ニ始テ之ヲ発見シタルニ因ル。故ニサンチン  
 ノ日ト云フ義ニ取ル。南緯十六度五十分ニアリ  
 大海中ニアリ。喜望峰ヲ距ル。五百五十里。アン  
 ゴラヲ距ル。三百五十里。ブレシルヲ距ル。五  
 百十里ニアリ。此島ニ最モ近キハ。此諸地ナリ。周  
 圍大畧七里高ク水上ニ拔ク海岸ニハ尖岩圍繞  
 シ。内部ニモ岩石山及谷アリ。就中二箇ノ美谷ア  
 リ。一ヲ寺谷ト名ク寺アル山ノ後ニアレハナリ  
 南方ニ一谷アリ。果谷ト名ク橙檸檬及石榴多ク  
 五六艘ノ船ニ供スルニ足ルカ故ナリ。寺ノ西ニ  
 好キ碇泊所アリ。但シ碇ヲ費ヤサ、ル為ニハ。勉  
 テ島ニ近接スルヲ要ス。但シ山陰ノ谷大ナルカ  
 故ニ旋風大起スル。アレハナリ。  
 此島ノ大氣ハ拾好ニノ健全ナリ。舟中ノ病者。此  
 地ニ至レハ皆速カニ回復ヲ得ヘキナリ。其低所  
 ハ炎熱堪ヘカラサルモ山上ハ非常ニ寒冷ナリ。  
 常ニ寒風アルニ由ルナリ。毎日雨ヲ下ス。五六  
 回日出後必ラス雨アリ。此島ハ枯瘦ニシテ乾燥ナ  
 レ。極テ清潔ニシテ良好ナル水アリ。寺谷ニハ甘



味清潔水アリ。山ヨリ出テ海ニ入ル。舟夫好テ身  
ヲ清潔スル所ナリ。更ニ二所ニ清水アリ。  
此島ニハ住民ナシ。其野獸多キハ。葡萄牙商人ノ  
曾テ移種セシ所。其恩ヲ感謝スヘシ。

千五百二十年ニ。葡萄牙人此島ニ碇泊シ。玳島ノ  
良好ナルヲ知リ。安閑ニ生ヲ送ルニ足ルヲ察セ

リ。塵世ノ紛擾ヲ厭ヒ。船中ニ飼フ所ノ鹿。兔。及鶏  
ヲ玳島ニ移シ。自ラ慰メリ。是ヨリ野獸次第ニ増  
息シ。往復スル船舶ニ多數ヲ供スルニ至レリ。殊  
ニ葡萄牙王ヨアン。壁書シテ此島ニ住居スルヲ

禁セシニ由ル。

土地ハ。原來枯瘦シテ乾燥ナレ。凡雨多ク。又山ヨ  
リ流レ出ル川アリテ。自ラ適宜ノ滋潤アリ。菓樹  
ヲ養フニ足ル。豆類モ其熟スル者。落テ自生スル  
ノ種トナル。

滿林橙。檸檬。及石榴アリテ。全年花アリ。實アリ。又  
影ハク。無花果ヲ生シ。黒檀。及薔薇アリ。然レ。凡脆  
弱ナルカ故ニ。用ニ適セス。各谷殊ニ寺谷ニハ。洋  
芥。芥子。馬齒莧。酸模。野生羅瑪加。密列。酸醬アリ。共  
ニ大ニ舟客ノシケウルボイク。

血液。衰敗スル病  
名。但シ新鮮食物



ニ由ルクヲ防クニ足ル

森林及山間ニ動物多シ山羊野牛其大ナル者ハ鹿ノ子又小犢

タニ似リ各色ノ野豚アリ然レ其之ヲ捕ヒ雞シ葡人

始テ以島ヲ登見セシ時ニハ四足獸ナク果樹ナ

シ唯清新水アルノミ然レ其葡人至ルノ後之ヲ

培養セシニ非サルニ自然蕃息シ今日ニ及ヒ谷

谷ニ充滿スルニ至ルハ實ニ驚クニ堪タリ是以

島ニハ渡航スル者ナク住民ナキハ故ナリ又山

鳥鳩コルフロンデレシ一鶏ノ及孔雀アリ射獵シ

得ス但シ狼象熊鷹スベルウエル鳥名毒蛇龜或ハ

蜘蛛及綠色蠅ノ蝨ノ如キヲ見ル唯甚大ナル

南側ニハ灰色及黑色ノ鷗夥シ又白色或ハ斑ア

ル鳥アリ其頸長キアリ短カキアリ礁上ニ卵ヲ

置ク之ヲ食スルニ極テ美味ナリ千六百三十八年我

カ船東印土ニ航スル者之ヲ痴鷗ト名ケリ蓋シ扶ヲ

以テ之ヲ打殺スルヲ得ルハナリ

岩礁ニ衝突シ遺存スルノ海水日熱ニ曝サレ自

然ニ白色ノ好塩ヲ結フ又上好硝石ヲ自生ス又

赤色ノボリエス名土ヲ出ス地アリ此土ヲテルテ



レムニアト名ク。蓋シレムノス島ニ産スル土ニ  
異ナラサレハナリ。其脂質及舌ニ附着スルノ性  
相同シ。南東部ニ満山美麗ナル赤色暗色軽色及  
褐色ノ染料ヲ出スアリ。又東部ニ眞珠色ノ染料  
ヲ出ス。輕色ト褐色ノ間ナリ。

秋島ノ海ニハ魚類多シ。然レモ海底渾濁。波浪激  
動スルカ爲ニ。岸角ニ於テ渙スルノニテ。沖ニ  
テハ捕フルヲ能ワス。殊ニ鯖マスボバングルス  
魚名ゼーハトネ。魚名ブラエセム。魚名カレブルス。魚名  
アリ。又臂大ノ蛇アリ。美味ナリ。又貝外牡蠣蟹等

アリ。其味英吉利産ニ勝レリ。又海藻ノ岩礁ニ固  
着シ。刀ヲ以テスルニ非サレハ剥シ取り難キア  
リ。秋島未ク開拓セス。住人ナシ。是葡王ノ住居ヲ  
許サレハナリ。蓋シ其終ニ私有ニ帰ス。一キヲ  
恐レテナリ。

許多ノ辛苦ヲ經ルノ後。上ニ記スル日本人ハ、  
キボ新本ニ達セリ。カルジナール名僧アルベルト名ア  
ウストリウス氏レトクスベスター名ルデル支國ノ  
役兼ブラカニセノハルトク候大ニ之ヲ饗應セ  
リ。ギユアノリエベタラヘラ及トレドヲ經テマ



ドリフトニ着セリ。ベリツピラス。西班牙王  
 之ヲ親愛シ。有名ナル宮殿。エスキユリアルニ送  
 レリ。而シテ為ニ寶庫ヲ開ケリ。三月ニシテカス  
 タリオンニ送り。アリカンテニテ離レ。マヨルア  
 及ミノルカ島ヲ経。ピサ港ニ至リ。ヘーテルニ謁  
 シ。其弟。フランスナル。フロレーンセルトワニ送  
 レリ。其鄭重ナル。フロレンセルヨリ。マドリツ  
 トニ至ル。片ニ方ラス。  
 此ノ如クニシテ。終ニ羅馬ニ達セリ。法王ヨリ。寺  
 領ノ境マテ。カルジナルヨリ。ネスフランキ

シユスガムハラヲ出シテ。日本人ヲ誘導セシム。日暮羅馬ニ  
 達セリ。宗教ノ長カラウジウス。アキエアセハ。此到着ヲ祝シ  
 之ヲ自家ニ誘ヒ止宿セシム。蓋シ日本ヲ出シヨリ。三年一月  
 二日ヲ費ヤシテ。茲ニ至レルナリ。  
 一日ヲ隔テ。第十三世法王。グレゴリウスニ謁セリ。行装極テ  
 美ナリ。前驅ハ法王ノ護衛隊ナリ。粧飾華麗ナリ。後從隊ハズウ  
 エフチエル人。及カルジナル。此ノ家族ナリ。皆紫色ノ粧飾ナリ。諸侯  
 及諸王ノ使節ハ。第三隊トナリ。鼓ヲ鳴ラシ。喇叭ヲ吹ク。而シテ日本人  
 ハ。三枚ノ絹外套ヲ着セリ。鳥花及水葉ノ縫落アリテ。相錯綜ス。外  
 套長ク空レテ。地ニ接シ。前面ハ相用ク。裾キ袖アリ。頭ニハ貴重ナ



田邊若也  
大正十三年

ルスロイエル袈裟ノ如ク作り肩ヨリ胸ニ掛ルモノ 腰ニ双刀ヲ帶フ真珠及金剛石ヲ具スルヲ彩シ羅馬貴人ハ皆其局ヲ鎖ツ而ノエンゲルビユルグノ大砲ハ皆打出セリ

ビスコッブアールヅビスコッブ及カルジナルレニテ法王ヲ圍繞シ各美衣ヲ服ス其状恰モヤコプスアウギユヌチユヌチユアニユスノ全世界ノ專制諸王ノ威光ヲ輝カス如シ余チユアニユスノ語ヲ記ス則チアルレルゲリユツクサリリフステ最上ノ幸福ヲ共フル佛ヲ謹テ拝シ且具足ヲ吸フノ後日本人捧クル所ノ以太利語ニ譯シ立派ニ記セル三王ノ書ヲ朗讀セリ原書第二十五二十六葉ヲ脱ス考フヘキナシ

川本八羅  
大正十三年

天正十五年六月三十日日本人ハ法王ノ足

ヲ吸ヒ敬禮スルノ後帰途ニ就キマンカハルコニ於テコラハノ體ヲ尊奉ス此心中ニハ一ラシングレ一デン隠レタルヲ見ルヘシアシハウムニ於テ名譽アルユケ所ノ創ヲ蒙ルルノ後アラシスキユスノ着シタル鬘及毛衣ヲ見ヘルハ一レニ於テ五百年前ニ昇天シ再ヒ神前札上ニ奉ルノ小狐ヲ見ル但シ此等ノ件ヲ教フルハカナリ一シノビスコッブノルシオルカニユスハ無要ナリトスル所ナリ



葡人日本に宣教  
スルヲ禁セリ

日本人ハ是ヨリ途次マシキユアミラーン<sup>西班牙</sup>及<sup>葡</sup>ポルケユガルヲ經テ日本ニ歸レリ。千  
五百九十年八月二十一日長崎ニ着シ。次テ京都  
ニ入レリ。是日本貴人ノ歐羅巴ニ至ルノ嚆矢ナ  
リ。爾後合衆阿蘭ハ日本ニ航路ヲ開キ。大利ヲ得  
タリ。殊ニ葡萄牙人ノ通商ヲ禁セラルノ後。最モ  
然リ。蓋シ耶蘇教徒騒動ノ片。葡王ハ船ヲ贖シテ。  
日本ニ襲ハントスル<sup>德</sup>謀アルヲ阿蘭ヨリ早ク  
書ヲ寄セテ。預メ報告注意セシメタレハナリ。  
葡人事ヲ議スル<sup>二</sup>遲疑シ。十六百四十年<sup>寛永十八年</sup>始テ着

葡人日本に宣教  
スルヲ禁セリ

手セリ。阿蘭人ハ三年前ニ於テ早ク既ニ航路ヲ  
開キ。莫大ノ進物ヲ捧ケテ。日本將軍ノ幸福ヲ祝  
シ。大ニ親睦ヲ得タルハ。則チ大利ヲ得ル所以ナ  
リ。其始テ貿易場ヲ開キシハ。小島平戸ニ於テセリ。  
東ハ豊後一名四國北ハ竹島南ハ五島ナリ。其ニ  
島ハ共ニ海中ニアリ。平戸ノ港ハ日本小船ニハ  
適スレ。阿蘭ノ大船ニハ不可ナリ。何トナレハ  
港ハ極テ狭ク之ヲ通過スルニ危ヲケレハナリ。  
其高浪ナルカ。或ハ颶風アルニ方テ水渦ヲ避ケ



船ヲ保安スルニ難シ。海底泥濘ニノ多  
洲アリ。是阿蘭船ノ屢危難ニ過リ所以ナ  
リ。例之アルステルダム<sup>船</sup>及ヒヤクトグ  
ロル<sup>船</sup>ノ難船ノ如シ市街ニ列ヲ為セリ。  
住民家屋木造ニテ租ナリ。薄板ヲ重層  
シテ屋脊ヲ覆フ。微カノ商人ハ此屋ニ  
在テ販賣ス。然レモ東印土商會ノ此  
地ニ貿易ヲ始メシ以來大ニ平戸候  
ヲ富饒ト為セリ。何トナレハ各地ノ  
商人競ヒ來テ阿蘭人ト通商シ為ニ新居

ヲトスル者多ク。地稅ヲ候家ニ納ルル。巨額ニ  
及ハナリ。就中阿蘭通商以來致年ナラスノ新  
街ヲ開クノ多ク。今既ニ四十街ニ及ハナリ。  
阿蘭商會所有ノ倉庫<sup>商館</sup>ハ木造ナリ。四大室五小房  
ニシテ更ニ庖厨食堂客房アリ。港ニ接シ梯アリ。水  
ニ入ル。然レモ極テ粗末ニシテ堅固ナラス。火災盜  
難及風雨ヲ凌クニ足ラス。故ニ<sup>寛永</sup>百四十年ニ  
阿蘭商會ニテ石室ヲ營ント企テタリ。然ルニ政  
府之ヲ許サス。終ニ長崎ニ轉移スヘキヲ命セリ。  
平戸ノ倉庫ヲ隔ツテ半里許。海灣ニ一木箱アリ。

商館ノ事  
長崎ニ移ス

平戸記



幅高共ニ一尺ニ過キス。妊婦群ヲ為シ来リ祈ル。蓋シ男ヲ攀ケン。ヲ求ムルナリ。之ニ采ヲ捧ケ。且木棍持太サ長サ指ノ如キ者ノ一端ヲ彫リ。陰莖ノ状ト為シ。併セ呈シテ。頻回唱テ曰ク。妾ニ男子ヲ授ケヨ。然ルヲ得ハ更ニ片ハ大ナル品ヲ呈スヘシト。

阿蘭人平戸ヨリ許多ノ荷物ヲ小舟ニテ長崎ニ輸送シ。且東印土商會ノ常用雜具ヲ備フルニ巨額ノ金ヲ費ヤセリ。寛永六十三年四年アムステルダム人ノルキユクオルサンドホイルド氏三十

年前マギユ船ニ乘シテマゲルラネスヨリ航スル中漂流シテ日本ニ至リ。終ニ坎地ニ滞住セルアリ。阿蘭人平戸ヨリ移轉セシニヨリ長崎ニテ貿易スルト為レリ。

(元)

此般ノ使節ハ正使ハブロクホヒウス氏ニテ。巨商アンドラスセリシウス氏副タリ。江戸ニ赴キ日本將軍ニ拜謁センカ為ナリ。旅装ヲ整頓シ更ニ日本將軍ヘ呈スル高價ナル進物ヲ調理ス。此一行ハ三船ト一小船ナリ。指揮官ハカロシ及テムノルト共ニ乗客ヲ誘導ス。ブロクホヒウス氏及ヒ

長崎の船は  
アランドラス  
アランドラス



伯帯比事記

ヤカハラ

父エ入何リ

出シナ  
往時維佳

リシウス氏ハレトウワールテシ号船ニ乘リ千六  
百四十九年七月二十八日正午少後ニ伯帯尼亞  
ニ投錨セリ

此地ハ最初カラッパ後ヤカトラ最後ニ伯帯尼亞  
ト称セルナリ抑モ此最後ノ名称アル所以ハバ  
タヒールスニ基ク此人ハエイランドニ生シ當  
時カワテシト称スルヘツセン國人ニ追放セラ  
ル蓋シヘツセンヨリバタヒールスノ名出ツ此  
類例ハヘンセンニアルバデンベルグ及バデン  
ハウセンナリ又レイデン外ハ疑ハシキカツテ

ヤカハラ王威權

ンウエーテテデルバタヒールスノ領地ナリトセリ  
コルネリスマイリースデヨンゲ氏千六百零七  
年此地ニ至レリ當時ヤカトラト称ス瓜哇式ニ  
倣フテ茅屋ヲ造リ水堀ヲ築ケリ但シ粗ナリ島  
王此時石壁ヲ築クノ企アリ此宮殿ハ通り抜ケ  
ニノ葭ニテ作ル四艘ノ舟アリ此中上ニ楫手  
ニ兵卒ヲ置ク多ク胡椒ヲ植ユ然レモ三百囊ニ  
上ラズ東印土商會此王ト契約シテ貿易ヲ為セ  
リ然ルニ其約ヲ守ラズ頻ニ運上ヲ増加セリ  
故ニ之ヲ固定スルニハ兵力ヲ強クスヘキヲ決セリ



英人モ蘭人ト共ニ此地ニ通商セリ。此ニ國間ニ不和  
ヲ生シ。遂ニ戦争ヲ開クニ及ヘリ。其戦日午ヨリ夜ニ  
至レリ。双方勇戦シ。終ニ蘭人敗績セリ。何トナレハセ  
船ヲ以テ十一船ニ對スレハナリ。止ムヲ得ス。アムゴ  
イナニ退キ。救援ヲ求メントス。然ルニ此時ヤカトラ  
王ハ英人ト謀ヲ合セテ大ニ蘭人ヲ苦シマシメリ。蘭  
人ハ新ニホイマスウリチウスヲ築ク。南ハナソウ  
ト名ク。北方濱ニ添テ土手ヲ築ク。高サ九尺。厚サ七尺  
ナリ。胸壁ナシ。敵ニ對シテ曝露ス。東方ハ三夫ナリ。町ニ  
向フノ角櫓ハ半成セリ。ホイスマウリチウスニ沿テ

北方ノ川端ニハ地上ニ尺ノ堤ヲ築キ。激浪ヲ堰  
タリ。其地ニ大炮ニ門小砲五門ヲ備フ。而ノ北東  
海端ニハガルデーント同シ。高サニバルレサ  
デシヲ備フ。護胸壁ニハ木製ノ屋脊ニテ雨ヲ防  
ク。七個ノサーケルスアリ。北東方ニハ尚未タ防  
禦ノ策ヲ設ケス。唯竹ノパツペルヲホイスマナス  
ソウ。及ガルデーニ砲門ヲ開キ。他ハ全部ヲ塞ク。  
ヤカトラニテハ堅固ナル壁ヲ築キ。周圍ニ赤石  
ヲ用フ。内ニ大炮ヲ備フ。又英ノ倉庫ニハ綱木及  
土ノ防禦アリテ。荷蘭人ノ侵入ヲ防ク。英人蔑砲



シテ開戦ヲ表ス。蘭人之ニ應シ。城ヨリ出テ。支那街ガラーヘン街。英ノ砲臺及倉庫ヲ焼ク。而ノ河濱ヲ押領セリ。ヤカトラヨリハ。バヤ哇小人。度炮シテ。蘭人ヲ打ツ。之ヲ防ク者二百四十人。其内八十人ハ黒奴ナリ。

然レモ英ノ船隊ヤカトラニ向フ者十一艘ナリ。我主宰クローニンハ。オウデゴン号船中ニ在リ。其指揮スル所ハ。デルフト。ゴウデレーウ。アムステルダム。セツピーン。エングルフ。ハルク。及ヤーゲルナリ。共ニ重載ス。故ニ放砲ニ便ナラス。然リト虽

英船ニ近接ス。但シ風強吹スルヲ以テ。帆ヲ張ル。一能ワス。故ニ小砲ヲ放ツノミ。英船紅旗ヲ飄シ。大ニ喇叭ヲ吹き。帆ヲ張り。駛行ノ勢アリ。則チ千六百十九年一月一日。相近接シテ一戦スルノ後。共ニ相分レ。ヤンピーテルス。ブーシク。ンク。ン氏ハ。アムボイナニ向ヒ。英人ハヤカトラニ向テ。上ニ記スルノセ。船ト戦フ。故ニ蘭人ハ水陸共敵ヲ受タルナリ。然ルニ。バヤ哇小人。四千ヲ引テ。バンタムヨリ来リ助ク。蘭人則チ之ヲシテ。今成功セル。第回地ノ周囲ニ在テ。防禦セシム。ビートルファン



デングブルーク氏ハ主宰クーン氏ノ命ニテ之カ  
 指揮タリ則チ四ヶ所ノ防禦所ニ新嶺ヲ掲ケ大  
 ニ市中ヲ打ツ此事大驚駭ヲ起セリ是ニ於テヤ  
 カトラ王ウエーヅユルクラマ氏講和ヲ請フ若  
 シ蘭人ハチレアーレニテ捧ケザル戦ヲ止ムヘシ  
 ラマ使節フンデンブルークニ口約セハ完全ヲ  
 得一シト抑モ<sup>瓜哇</sup>小人ノ詐欺ハ屢驗スル所ナ  
 レハ其請願スル所或ハ困難ニ及フヘキヲ察セ  
 サルニ非サレ<sup>ト</sup>尚之ニ赴クヘキヲ決セリ既ニ  
 ノ至ルニ忽チ殘酷之ヲ捕ヒ請フ所ヲ肯ハサレ

ハ則チ頸ヲ刎ントス強テ城ヲ渡サンヲ請フ  
 而ノ脅迫スルニ即死ヲ以テス之カ為ニ頸固ニ  
 索ヲ纏ヒ蘭砲ノ下ニ在ラシノ屢暴威ヲ示ス為  
 ニ之ヲ引テ宮中ニ入ル

又英ノ指揮官トマスダール氏失書ヲ城内ニ寄  
 ス其文ニ曰ク直チニ百物ヲ附共セハ其血ヲ注  
 キタルヲモ無罪ト看做スヘシマウリチユス家  
 屋ニ向テ十六門ノ砲ヲ備ヘタリ遲疑セハ船隊  
 ヨリ陸ニ向テ多數ノ砲ヲ放ツヘシト次日第二  
 書ヲ寄ス約スル所アリ曰ク英人ニ使役セラル



ヲ望マサル者ハ二月内ニ退去スヘシ此約ヲ守  
ラサルヲアラハ直チニ大砲ヲ放チ百物ヲ潰崩  
スヘシト

城内ニハ彈藥匱乏シ強打セハ復タ一日ヲ支  
ス英人<sup>ジカ哇</sup>ハ人ヲ助ケ<sup>アリ</sup>且適宜ノ船隊ヲ備フ城  
内ノ人ハ不眠ト勞働トニ由テ衆皆疲ル又ニウエ  
ーホイスマウリチウス銃孔ヲ塞クニ足ルヘキ  
上ヲ存セス且何奈思慮スルモ四月前ニ主宰ク  
ーニ氏ヲ救フヘキノ策ナシ困難亦極ル止ムヲ  
得ス英人ノ請ニ任セントス然ル<sup>ハ</sup>兵<sup>器</sup>トヲ

渡シ又ウエージュールク<sup>ラ</sup>マニ<sup>ニ</sup>商品貨賤ヲ興フヘキ  
ナリ而ノ英人ヨリハ蘭人ニ大砲二門小銃五十挺彈  
藥一箱ヲ備フル船ニ六ヶ月用料ノ食品ヲ附シ諸品  
請取渡濟ノハ直チニ出帆スルヲ得ヘキナリ  
然リト虽既ニ此極ニ至ルニ及テ將ニ城ヲ引渡  
サントスルニ當テ一顛覆アリテ大ニ全形ノ面  
目ヲ一轉セリ一賈人コレネリスホウトブラケ  
ンバンタムセバ<sup>ン</sup>ガ<sup>ラ</sup>ンニ<sup>ニ</sup>航セントスルニ方  
テ捕人フハンデングルー<sup>ク</sup>氏ニ接話スルヲ得  
タリ捕人彼ニ請曰クク<sup>ー</sup>ン<sup>氏</sup>ヲ来ルマテ願ク



ハムゴレヤカラ  
王ヲ逐フ

王ヲ逐フ者トシ

ハバングランニ捕ハレシヲ若シ然ルヲ得ハ  
其恩惠謝スルニ辭ナシトバングラン此企ヲ聽  
キ迅速ニ二千人ヲ率テドムマゴンニ出帆シテ  
マ英人及ヒ蘭人ノ間ニ周旋シドムマゴンハバ  
ングランスノ書ヲラゴニ寄ス其之ヲ讀ムニ方  
テ一刀ヲ抜キ之ヲ王ノ胸前ニ當テ曰ク汝汝ノ  
富ヲ興フルヤ或ハ一死人トナルヲ求ムルヤト  
王驚怖シテドムマゴンニ告別シ其婦及長子ヲ  
携テ追放セラレ田舎ニ赴ケリ後更ニ零落シテ  
一貧人トナリ海濱ニ在テ魚ヲ漁セリ

ハバングラン  
城ヲ圍ミテ

英人大ニ之ヲ驚視シバングランノ城ノ周圍ニ  
テ折タルファンデングルーク氏ハバングランニ退  
キ英人ハ大ニ其望ヲ失ス籠城者愈勇氣ヲ勵マ  
シ終ニ之ヲ保存維持スルヲ得タリバングラン  
ブルーク之ヲ伯帯比重ト名ケ大書シテ門ニ刻  
セリ然ルニ三月二十五日ターン氏十七艘ノ船  
ヲ舩シテモリユシヒ島ヲ渡シテ伯帯比重ニ至  
リタルニ此城ニ命名スルハ未タ知ラサル所ナ  
ルヲ以テ之ヲ削除セシム翌日兵卒十二人ト舟  
子トヲ上陸セシメタルニ其二人ヤカトラニテ



踪跡ヲ失ス家屋及堤壁ヲ探索シテオニ至ルマ  
 テ遺ス所ナシ此ノ如クスルノ後バンタムニ赴  
 キバンゲランニ就キ指揮官フンデンフルーク  
 及十七人ノ捕人ヲズワルテレーウー船ヨリ出  
 セリバンゲランハ之ヲ喜ハスト虽脅迫セラル  
 ヲ以テ上ニ記スル船ノ舊端舟ト共ニ六十三人  
 ヲ送り翌日更ニ他ヲ送レリフハンデンフルーク  
 氏亦此内ニ在リ然レモ英人ハクーン氏到着ソ  
 報ヲ得テ井樓ヨリ大砲ヲ放テ出帆シ十八船ヲ  
 引テシユンダ街ヲ經テ隠レリ

六月九日英ト荷蘭東印土商會トノ間ニ和ヲ講  
 シ角未愈堅固トナリ終ニ拔群ノ伯帶比亞域ト  
 ナレリ此新築ハ庇哇王ハ己ノ所領地内トス  
 ルヲ以テ喜ハス此哇ニ蘭人ノ住居スルヲ大  
 ニ恨ノリ殊ニ支那人日本人蘇門答刺人シユカ  
 ガーネン暹羅人及他人ヨリ稅ヲ收ムレハ十  
 リ千六百二十年被一萬五千ノ兵ヲ引テ伯帶  
 比亞ニ来リ城ノ四方ヨリ砲ヲ放ツ連撃止マヌ  
 大砲石榴彈ヲ連放シテ堤ヲ壞リ壁ヲ破リテ直  
 チニ進テ人ヲ殺戮スルト日々多數ニ亘ル防拒



ハタヒ外ハ  
ニ激戦

頗ル死カヲ盡ス屍體ハ川ニ投スルヲ以テ且ワ  
河水ハ板ニテ流ヲ遮ルヲ以テ溺死堆積シ有毒  
ノ臭氣ヲ放チ河水飲ムヲ得ス故ニ深井ヲ掘テ  
伯蒂比亞人ハ僅カニ之ヲ飲用ニ供ス此籠域中  
最モ驚クヘキハ此街ノ最末端ニアルマクタレ  
ーンドイトニ瓜哇人侵入シタルナリ歌ハ四  
方ヨリ進撃シ全丘上ニ登リ我兵之ヲ守ル者僅  
カニ十六人彈藥彈丸忽チ匱乏スルヲ以テレド  
イトノ尾及石ヲ以テ投棄シテ久時敵ヲ拒ケリ  
是亦缺乏スルニ及テ<sup>キ</sup>圍中ノ人糞ヲ取テ投スル

ハタヒ外ハ  
ニ激戦

ニ至レリ然レモ能ク之ヲ保持シ<sup>瓜</sup>ヤハ人援タ  
敢テ進マス終ニ十六人ヲシテ阿蘭人猛勇耐忍  
ノ氣象ヲ現ハサシメタリ是ニ於テ彼輩退散シ  
其<sup>キ</sup>言ヲ以テ曰クオセイメングオラングホル  
ラングデハカライサムマタイ蓋シ汝輩阿蘭  
人ハ魔ナリ糞ヲ以テ戦フトノ意ナリ  
<sup>瓜</sup>ヤハ小人勇氣弛ミ戦圖勝利ナリヲ察シ十一月  
一日兵士ニ命シテ三ヶ所ニ放火セシム籠域人  
ハ其禦ク可カラサルヲ知り潜伏シテ天明ヲ待  
ツノミ翌日ヤコブスベキス氏ハ一二ノ輕兵及







シト全軍マジユラヲ固ミ之ヲ殺セリ以テ八百人ノ靈ヲ祭ル

自末伯帯比西平穂ナリ此平穂中ニ於テ此盛昌

ヲ為セリ實ニ東印土諸市中ノ一繁華地トナレ

リ此地ヨリ慶安二年千六百四十九年七月二十八日ニ上

ニ記スルカ如ク日本帝將軍ノ使郎グロクホヒウ

ス氏出帆セリ則薩門答刺ノ角ニアルリユカパ

ラ街及バンカ島ニ向フ八日ノ後ピユロチユモ

シテ右側ニ見ル是慰樂スヘキ一島ナリ樹木多

キ山アリ安全ナル谷アリ清鮮ナル水アリ海上

ニ高ク出テ且大ナリ北東角ニ小島アリ之トチ

モントノ間ニ自在ナル通路アリチモンニ着岸

スルニ便ナリ茲ニハ野生ノベータール有名ナリ

柳モ印土人ハ男女共ニ日々毎朝食後又毎夜又

外出スルニハ此根ヲ咬マサル者ナシ然レ氏其

根苦味ナルカ故ニ之ニアレラ或ハ石灰ヲ和シ

或ハカルビユルデヒユルネオアロイホウト麝

香或ハ他ノ香料ヲ配ス蓋シ謂ラクベータールハ

氣息ヲ佳香ナラシメ齒艱ヲ固定シ胃ヲ消化ラ

進ムト但シ君長ノ前ニハ之ヲ咬ムヲ不敬ナリ

三

三

三



トシ好テ大ニ胡椒ヲ用フ。又ホツブノ法ニ倣フ  
テ火ヲ焚ク。アリ或ハ全熟セル金色葉ヲ好ム  
アリ或ハ枯葉ヲ愛スルアリ之ヲ咬ノハ其始津  
唾血紅色トナル之ヲ咯出ス然レ氏弟二回ヨリ  
ハ之ヲ嚙下スルナリ。若シ之ヲ多敗スルニ非サ  
レハ其地零落ス一キナリ。ジヤハ人ビエロケモ  
ンヨリ満舟ノニテルヲ家ニ携ヒ来ル。海岸ニ  
テ販賣盛ナリ。陸地ニテハ頗ル高價ナリ。  
船隊ハ海路ヲ進行シテ十二日ビエロコンドル  
ヲ見ル。一小島ナリ之ヨリピエロセシルデイルカ

低沙地ナリ。東埔塞ノ陸ニ在テ海峡ニ

突出スルナリ。屢日本人ホルトガル人交趾人

ネセ及味味人ノ侵ス所ナリ。東埔塞

王ハ宮内ニ住ス。木廠ヲ備フ。蓋シ十六象ヲ畜フ。

大砲二十四門アリ。以テ及北邊ノ防禦ト為

ス。其大砲ニハ青色画彩ヲ附シ。彈丸ハ黒漆ニテ

塗ル。其執政ヲオキナスト称ス。衆人群集中ニ出

ルニ金袋ヲ携フ。之ニハ三個ノ金箱ヲ包ム。内ニ

カルダモム他ノ香料。及一ノ秤ヲ納ル。但シビナ

シグヲ製スル為ニス。衆人王ヲ圍造スルニ半月



使節謁見  
カバシテ  
カバシテ  
カバシテ

状ニ群坐ス其背後ニトニムネスアリ銀貨ヲ携  
フ禿頂ノ猿王ノ近傍ニ在リ水造ニノ漆塗セル  
柱上ニバゴ一デアリ金粉ニテ粧飾ス床ニハ筵  
ヲ敷ク堂上ニ三大三小像アリ使節謁見スル時  
ニオキナスノ下ニ坐ス王ヲ距ル二十四歩ナリ  
書牘ハ譯官之ヲ讀テカバンデルニ告クカバン  
デル之ヲオキナニ報スオキナ之ヲ執テ頭上ニ  
捧ケテ王ニ呈ス日本人本國ヨリ追放セラレガ  
東埔塞  
ヤボジヤニ土着スル者八十餘家アリ亦王ニ謁  
ス蓋シ曾テ王子其父ノ位ヲ奪ハントシタル時

蘇ノキ云

ニ効アリタレハナリ  
其後船隊ハシヤムバキ過キ第四日ニサントヨ  
ハンデヒキスニ達ス一高山ナリ其上ニ尖タル  
丘アリ月状ナリ是ニ於テ八月十五日ト十六日  
トノ間ニ於テ夜使節ゴロクホーヒウス氏死セ  
リ其體ハ直チニ夜サ爾撒護シ内臟ハ三層重ノ  
櫃ニ納メ船外ニ投セリ而シテ船隊ハビエロカハ  
ビール及オタオヲ過キ終ニ安南島及瑪甲港ヲ見  
ル此四日間多ク漁舟ヲ見ル  
瑪甲港又マツカオハ一小島ナリ北緯二十度ニア

亞瑪港

(三)



リ支那ニ接スルニ細キ海峡ヲ以テス此峡石門  
アリ決シテ葡葡ガル人ニ通過セシメス輸出  
入ノ貨物共ニ税ヲ支那ニ納ム廣東ノマンドレ  
ーンス葡葡ガル人ヲ邊鄙ナルハンペオ  
アオニ於テ降伏セシメ瑪甲港一市ヲ開クヲ  
許セリ則チ堅固ナル壁ニテ圍擁ス三角状ノ位  
置ナル三山上ニ三城ヲ築ケリ其最ナル者ハサ  
ントハウロナリ三十六磅ノ大砲三十四門ヲ備  
フ以テ主長者ノ住所ヲ警護ス第二城ハノスト  
ラセイグノラデラベンナデフランシアナリ而

ノ第三城ハノストラセイグノラデキエエルトナ  
リ十字教師住ス日本人マニルラ人或ハ他所ヨ  
リ入港スル船アレハ此山上ニテ鐘ヲ鳴ラシ市  
中ニ之ヲ報シ且警メシム四個ノ臺場アリ一ハ  
陸ニ三ハ海ニ備フ其最ナル者ハサントヤゴデ  
ラハルラト称ス蓋シ構造良好ニノ且軍卒住居  
シ一個ノ市街ヲ為ストノ意ニ出ルナリ二門ノ  
大砲ヲ備ヒ彈藥十分ナルヲ以テ防護頗ル堅固  
ナリ諸船舶必ラス此近邊ヲ通過セサルヲ得ス  
此主宰ハ王ノ命スル所ニノ自ラ知事ト称スル



ヲ得ス。第二ヶ所ハノストラセイグノラデルボ  
ンハットニテ南西ニアリ市外ニ一ノ彈藥製車  
アリ是ヨリ半月状ノ堤ヲ築キ外面ニ壁アリ以  
テフランシスコニ連ス此兩所ノ間ニ家屋アリ  
海岸ハ工場ニ供ス第三ヶ所ハフランシスコ  
ト称ス根脚ハ扁平ナリ四十八磅ノ大砲ヲ備フ  
真射カカスセアン島ニ連スヘシ之ヨリ壁ヲ造  
リ陸ニ連シ第四ヶ所則ヤントヨハンニ連ル茲  
ニハ陸門ヲサロアリ是ヨリ山ニ連ナリ基督寺  
ニ詣スヘシ壯大ナル建築ナリ麻甲ノ内ニイハ

瑪甲

ソイテンドミニカトネンフランシスコトネン  
フウギユスチニアトネン及カラシーセンアリ  
各一寺院ヲ有ス三大寺アリ粧飭頗ル盛ナリ其  
僧ハ<sup>麻甲</sup>ノアールスヒスコツブニ屬ス  
麻甲ノ交易ハ諸國ノ船舶來港スル所ナリ則チ  
東京キユイナムシヤム<sup>東埔塞</sup>ボチヤマカツセ  
ルソロシチモルマニルラスナリ往時ハ日本人  
來レリ皆<sup>麻甲</sup>執政ノ許可ヲ得ルニ非サレハ決  
シテ入港ヲルヲ得ス貿易品ノ大ナル者ハ金銀  
白絹金色羅紗口ヘーネン真珠麝香水銀 スビリ



臺灣島記事  
三二

アウテ  
陶器土茯苓大黃及各種ノ<sup>製</sup>干業品ナリ  
麻甲ヲ出帆シ復夕之ヲ見サレニ至テ八月四日  
恐ルヘキ暴風ニ遇フ雷電アリ其朝舟子皆曰ク  
彗星アリ長サニガラーセン其狀蛇ノ如シ風雨  
止マサル一三日碇泊スルノ暇ナシ電霈甚夕シ  
キヲ以テ唯之ヲ防クヲ勉ムルノミ既ニノ僅カ  
ニ小帆ヲ掛クルヲ得タリ背後ニ漂流スル一九  
里又霧雨ニ遇フ舟子ビートルドウウエニスブ  
ン外槓及大帆ヲ失セリ指令官相會シテ唯之ヲ  
保存スルノ策ヲ議スルノミ而シテ風止ミ天氣之

三二

ヲ許サハピスカドレズ諸島ニ達セシ一ヲ企望  
ス然ルニ夜中帆ヲ括ル為ニ辛苦ス翌朝ニ至テ  
風雨稍減ス故ニ艫帆ヲ揚ケ遙カニ南方ニ出ツ  
北緯二十二度ニ至ル日午風再ヒ強吹東来シテ  
止マス帆ヲ吹飛セリ衆皆遁ル可ラサルヲ決ス  
夜ニ入り風愈劇シ若シ夜半ニ及テ止マサレハ  
死眼前ニ在リ此時一帆ヲ揚テ東行シタルニ支  
那陸地魁山ヲ距ル一里許ニシテ終ニ北緯二十  
二度ニ至リ臺灣ニ近接スルヲ得タリ  
此島ハ支那人ハツカンドト称ス東北ヨリ南西

臺灣島記事



ニ直ル三十二里ニ過ク。周圍總計百三十里ナリ。  
高山ニ富ミ鹿山羊兔飛兔野猪野鷄布鳩及リユ  
ハネ<sup>ハ</sup>ネ<sup>ハ</sup>アリ<sup>ハ</sup>肉<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>極<sup>テ</sup>美<sup>味</sup>ナル<sup>ル</sup>更ニ沙糖生姜肉桂  
肉豆蔻及他ノ食料ヲ產物トス。又臺灣ニハ村落  
及人員多シ酋長致人アリ常ニ黨ヲ爲シテ相争  
フ。甲村乙村相戦夙休息ナシ村落ノ最ナル者ハ  
シンカンマングウノウラレグバツケルカングタ  
フカンチヒユリユカンテオバン及チヒユラン  
グナリ此テヒユラングハセーランジフ城アル  
山中ニアリ往時ハテオハント称セリ相距ル

住人野蠻ナリ

一日半程アリ此住人ハ野蠻ナリ男子ハ極テ強  
壯ニノ大ナリ羊鬼ノ如シ但シカワヘルスノ如  
クニ全黒ニハアラス歩行スルニ陰所ヲ蔽ハス  
婦人ハ短矮ニシテ肥胖ナリ唯習慣ニテ一日ニ  
回市上ニ出テ各人ノ爲ニ眼ヲ洗フ巾ノ外ハ衣  
アリ皆懇厚親愛ナリ蘭人食物及飲料ヲ應分ニ  
共テ饗應ス

住人

但シソウウラシク村ハ營生法乞丐ノ如シ報讐貧  
利殺戮ヲ好ム良田アレ氏必需外ヲ要セス或ハ  
他ヲ欺<sup>掠</sup>テ勉<sup>ム</sup>ノス耕耘ハ婦人ニ托シ勞ヲ厭フ馬



牛ニ缺クヲ以テ止ムヲ得ス鋤ヲ用フ斧ヲ以テ  
地面ヲ耕シ稻ヲ植フルニ深キニ過ク鎌及大鎌  
ナキヲ以テカニ異ナラサル器械ニテ一穗毎ニ  
之ヲ截ル収獲後之ヲ日乾セスノ直ニ屋内ニ  
納レ夜之ヲ火上ニテ乾カスナリ婦人ハ晴雨ヲ  
論セス日々之ヲ搗テ其日ノ食料ニ供ス稻ノ外  
更ニ他物ヲ播種ス例之胡蘿蔔水柑ビナングキ  
ユアクタラウン及ブチングナリ

臺灣ニハ印土ノ彼此ノ地ニ於テ樹木ヨリ釀成  
スル如キ酒及他ノ強液ヲ存セス然レモ別ニ一  
種ノ飲料アリ其醱酲スルノ西班牙酒ニ異ナル  
トナシ此飲料ヲ製スル法左ノ如シ米ヲ蒸シ搗  
キ碎キ泥トナシ之ヲ咬ミ碎キテ壺内ニ吐キ貯  
ヘテ其酸性酵母トナルヲ待ツ既ニ水ヲ注キ  
米ヲ納レタル大ナル桶ニ貯フ此ノ如クニ大  
抵二月ヲ經レハ變スヘキ透明ナル強液トナル  
愈日ヲ經レハ愈良トナル之ヲ保存シテ三年ニ  
至ルヘシ其液上邊ハ清澄ナレモ下邊ハ渾濁シ



テ糜ノ如シ。故ニ上澄液ハ飲料トナシ。下濁物ハ  
匙ヲ以テ嘗ム。田野ヨリ帰ル後壺或ハ竹器ヲ以  
テ之ヲ飲ミ。且ツ食ス。禾ハ多クハ此液ヲ醸スニ  
費ヤスタリ。

婦女ハ農事ヲ終レハカムバンス籠ノ類カヲ携テ魚

蟹。牡蛎。及海老ヲ捕フ。此魚ハ鱗ヲ除カス。腸ヲ出

サスシテ。鹹水ニ浸ス。故ニ速カニ腐敗シ多。其ヲ

生ス。是土人ニハ殊ニ美味ナリトスル所ナリ。強

壯ナル男子ハ。懶惰放肆ニ日ヲ消ス。四十歳ヨリ

五十歳ニ至ル間ハ。晝夜其婦ト共ニ一小屋内ニ



